

史跡咸宜園跡

西家の発掘調査成果報告書

2023年

日田市教育委員会



調査地周辺空中写真 [赤枠内が史跡或宜園跡] (南から)



令和元年度 調査地全景写真 (南から)

序 文

日田市は北部九州のほぼ中央、大分県西北部に位置しています。

市の中心は盆地であり、その周囲は山々に囲まれ、そこからの豊富な水が清流となって私たちの街を潤すことから「水郷日田」の名で親しまれています。

この豊富な清流はやがて九州随一の大河である筑後川に繋がり、筑後・肥前を経て有明海へと至ります。こうした水の流れがあったからこそ、文化の面でも日田は交通の要衝となりえ、江戸時代には徳川幕府によって九州地方を統治する西国筋郡代役所が置かれます。そして、九州の政治・経済上の重要な位置を占めることとなり、豆田町・隈町の商人を中心とした町人文化や学問・芸術の華が開きました。

史跡「咸宜園跡」は、儒学者廣瀬淡窓が江戸時代後期に創設した私塾の跡として、日田市内で最も早く国の史跡として指定されました。「咸宜園」は、全国 60 か国以上から 5,000 人を超える入門者が集った近世日本最大規模の私塾です。

本書は、平成 30 年度から令和 2 年度までに実施した咸宜園西家側の発掘調査成果をまとめたもので、今回の発掘調査によってこれまで確認することができなかった西家側の状況を垣間見ることができました。

こうした成果を今後の教育や地域づくりにもつなげるべく、郷土の誇るべき文化遺産・貴重な地域資源としての活用を図ってきたいと考えております。

この報告書が、文化財の保護や地域の歴史、学術研究などに、今後ご活用いただければ幸いです。

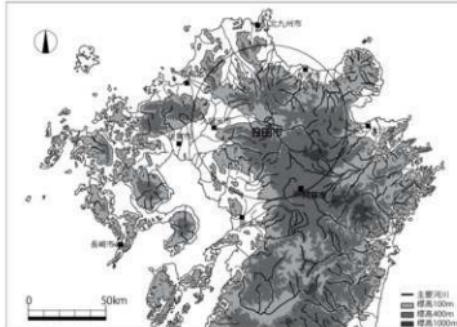
令和 5 年 3 月

日田市教育委員会

教育長 三筈 真治郎

例　　言

1. 本書は、平成 30 年度から令和 2 年度までに史跡咸宜園跡西家の範囲や内容を明らかにするために行った重要遺跡確認調査に伴う発掘調査報告書である。
2. 発掘調査及び本書の作成は、文化庁の補助事業である埋蔵文化財緊急調査費国庫補助と大分県文化財保存事業費補助（ともに事業名は「市内遺跡」）を受けて実施した。
3. 発掘調査は、日田市教育委員会が主体となり、大分県教育委員会の指導を受け実施した。
4. 本書が扱う「咸宜園」とは、廣瀬淡窓が文化 14 年（1817）に旧堀田村の現在地へ塾を移転してから、明治 30 年（1897）に閉塾するまでをいう。また、私塾咸宜園は道路を挟んで東西に広がっている。伯父月化が建てた秋風庵（東家）と塾主の住まいであった考槃樓（西家）があり、その周囲に塾舎等の建物が存在していた。本書では、道路の東側の秋風庵周辺の指定地範囲を「東家」、西側を「西家」とする。
5. 本報告は、史跡の内容確認のものであるため、本書で報告している遺構の時期は咸宜園の時代（咸宜園が現在地に移転した 1817 年から閉塾する 1897 年とその前後）に限ったものであり、それ以外の時代については、本書とは別に報告書の刊行を予定している。
6. 発掘調査の概要については、既にその一部を年報で報告しているが、本書をもって正式な報告とする。
7. 本書の調査報告に用いた空中写真は、有限会社測量企画センターに委託した成果品を使用した。地形測量図については、朝日コンサルタント有限会社に委託した成果品を使用し、各遺構図、出土遺物の実測図や遺物写真などについては、有限会社九州文化財リサーチに委託した成果品を使用した。そのほかの写真は調査担当者が撮影したものを使用した。
8. 出土遺物の時期比定は、吉田寛氏（大分県立埋蔵文化財センター）による指導、有限会社九州文化財リサーチの委託成果に基づいている。
9. 本書に掲載している図面類、出土遺物や関係写真については、日田市埋蔵文化財センターに保管している。
10. 本報告には平成 29 年度に行った咸宜園建造物などに関する文献史料などの調査成果を併せて掲載（第 IV 章）している。
11. 本書の執筆・編集は、第 IV 章については渡邊、その他については渡邊・行時の協力を得て上原が行った。



本文目次

Iはじめに	1
(1)発掘調査の経緯	1
(2)発掘調査の組織	2
II史跡の環境と歴史	3
(1)日田市の地形と環境	3
(2)日田市の歴史と史跡周辺の遺跡	3
(3)史跡の概要	5
III発掘調査の成果	6
(1)18次調査(平成30年度調査)	8
(2)19次調査(令和元年度調査)	9
(3)20次調査(令和12年度調査)	22
IV咸宜園西家に関する土地・建物等の文献等調査	24
(1)経緯	24
(2)西家敷地の変遷	25
(3)西家の建造物と史資料調査	26
(4)調査のまとめ	32
V総括	33

挿図目次

第1図 史跡周辺の遺跡地図(1/20,000)	4
第2図 史跡周辺の地籍図(1/1,500)	5
第3図 発掘調査年次配置図(1/1,000)	7
第4図 18次調査位置図(1/2,000)	8
第5図 18次調査 出土遺物(1/3)	8
第6図 18次調査 土層確認トレンチ平面図・土層断面図(1/40)	8
第7図 18次調査 造構配置図(1/150)	9
第8図 19次調査位置図(1/2,000)	9
第9図 19次調査 造構配置図(1/150)	10
第10図 19次調査 1号土坑及び1トレンチ平面・土層断面図(1/40)	11
第11図 19次調査 1号土坑 出土遺物1(1/3)	12
第12図 19次調査 1号土坑 出土遺物2(1/3)	13
第13図 19次調査 1号土坑 出土遺物3(1/3)	14
第14図 19次調査 2号土坑及び2トレンチ平面・土層断面図(1/40)	15
第15図 19次調査 2号土坑 出土遺物1(1/3)	16
第16図 19次調査 2号土坑 出土遺物2(1/3)	17
第17図 19次調査 2号土坑 出土遺物3(1/3)	18
第18図 19次調査 3号土坑 平面・土層断面図、1トレンチ西壁土層断面(1/40)	19
第19図 19次調査 3号土坑 出土遺物(1/3)	20
第20図 19次調査 溝状造構平面(1/60)・土層断面図(1/40)	21
第21図 20次調査位置図(1/2,000)	22
第22図 20次調査 造構配置図(1/100)	22
第23図 20次調査 出土遺物実測図(1/3)	22

第24図	20次調査 2トレンチ平面・土層断面図 (1/40)	23
第25図	20次調査 3トレンチ平面・土層断面図 (1/40)	23
第26図	史跡咸宜園跡周辺旧字図 (1/200)	25
第27図	現字図と旧字図比較図 (1/2,000)	25
第28図	西家境界付近発掘調査図 (1/400)	25
第29図	屋宅間取り想定図	29
第30図	西塾間取り想定図	29
第31図	明治時代咸宜園絵図	29
第32図	大正時代咸宜園絵図	29
第33図	西家構造物変遷図 (1/700)	31
第34図	西家側建物想定位置図及び遺構配置図 (1/350)	34

表目次

本文写真目次

表1	発掘調査一覧表	6	調査風景1 (平成30年度)	2
表2	咸宜園西家土地等沿革表	24	調査風景2 (平成31年・令和元年度)	3
表3	咸宜園西家建造物関係記述一覧表①	27	調査風景3 (令和2年度)	3
表4	咸宜園西家建造物関係記述一覧表②	28	写真4 日田郡役所写真 (史跡調査報告書転載)	26
表5	咸宜園西家建造物詳細表	30	写真5 産業会館写真 (廣瀬恒太氏撮影)	26
表6	咸宜園西家建造物消長表	31		
表7	出土遺物 観察表1	35		
表8	出土遺物 観察表2	36		
表9	出土遺物 観察表3	36		

写真図版目次

写真図版1

18次調査 空中写真1 (上が北)

18次調査 空中写真2 (上が北)

写真図版2

19次調査 空中写真 (上が北)

19次調査 調査地全景 (東から)

写真図版3

20次調査 空中写真 (上が北)

20次調査 調査地全景 (西から)

写真図版4

18次調査 土層確認トレンチ (南から)

18次調査 土層確認トレンチ北壁 (南東から)

18次調査 土層確認トレンチ北壁 (南西から)

写真図版5

19次調査 1トレンチ土層断面西側 (南から)

19次調査 1トレンチ土層断面西側 (南から)

19次調査 1トレンチ西壁土層断面 (東から)

写真図版6

19次調査 1号土坑遺物出土状況 (南から)

19次調査 1号土坑遺物出土状況2 (西から)

19次調査 2トレンチ土層①土層断面 (東から)

写真図版7

19次調査 2号土坑遺物出土状況 (西から)

19次調査 2トレンチ土層断面 (南から)

19次調査 溝状遺構模出状況 (東から)

写真図版8

19次調査 溝状遺構土層断面 (西から)

19次調査 溝状遺構土層断面南側 (西から)

19次調査 溝状遺構土層断面北側 (西から)

写真図版9

19次調査 溝状遺構模出状況 (南から)

20次調査 1トレンチ模出状況 (東から)

20次調査 2トレンチ土層②土層断面 (東から)

写真図版10

20次調査 2トレンチ土層②周辺模出 (南から)

20次調査 2トレンチ土層①土層断面 (東から)

20次調査 3トレンチ土層断面 (西から)

写真図版11・12 出土遺物

I はじめに

(1) 発掘調査の経緯

史跡咸宜園跡は、豊後日田の儒学者 廣瀬淡窓が創設し、後に近世日本最大級の規模を誇った私塾「咸宜園」の跡である。昭和7年7月23日に国の指定を受けたのち、所有者である廣瀬家と日田市が中心となり、管理を行ってきた。

平成4年度には「史跡咸宜園跡保存整備基本構想」(以下、整備基本構想)を策定し、同年から平成25年にかけての17次におよぶ調査では、主に東家側の発掘調査を行い、史跡の範囲や内容を明らかにしてきた。

こうした成果によって秋風庵の改築変遷や移築されていた遠思樓の位置の特定、東塾の位置の推定、心遠廬(招隱洞)遺構や風呂・便所・洗い場などの遺構、更には史跡の境界を示す東側石列や西側境界溝の発見へとつながった。こうした成果や絵図、淡窓の著作物などの文献史料調査の成果を基に、東家側は平成26年度までに史跡の整備を完了してきたところである。

一方で西家側は、史跡指定以降、公的施設や民間施設などが史跡地を占有していたことから、史跡の内容を把握するための調査が行われてこなかった。しかし、平成15年から継続していた民間団体との交渉によって平成28年度には建築物の解体と用地の公有化が完了した。そこで、未調査であった西家側の遺跡の範囲や内容を確認し、今後の保存活用に必要となる情報を得るために、平成29年度に遺跡の確認調査を実施するための包括的現状変更の申請(平成30年3月7日申請、同年5月7日許可)を行い、平成30年度から3か年計画で西家側の発掘調査を実施することになった。

調査の経過については以下の通り。

平成30年度

5月16日に測量のための除草を実施、同月28日～7月31日にかけて現地の地形測量を実施した。平成30年度は、民間施設の所在していた範囲約436m²を対象に8月21日から重機により公有化時に遺構保護のため残していた旧建築物の基礎割栗石の除去を開始し、9月3日から調査地南側の表土除去を行いながら遺構検出を開始した。11月に調査補助業務による実測図の作成を開始し、空中写真撮影を実施した。その後、12月から平成31年1月にかけて北側の検出作業と確認トレンチの掘り下げを行った。同年2月13日に大分県文化課の山路副主幹による現地指導を受け、同月21日に空中写真撮影を行い、同年3月25日に埋め戻しと機材の撤去を終えて調査を終了した。

平成31年度（令和元年度）

平成31年度は民間施設による地下遺構の削平が少ないと予測された西側308m²を対象に令和元年7月1日に個別の現状変更計画書の承認を得た。また、同年5月からは、平成30年度の調査で除去によって地下遺構へ及ぼす影響が少ないと確認された民間建物基礎コンクリートの撤去工事を行った。その後、10月16日から重機による表土除去を開始し、11月5日より遺構検出作業を行い、29日から調査補助業務による実測図などの作成を開始した。12月からは確認のためのトレンチ掘りを行い、その後、令和2年3月30日に埋め戻し及び機材を撤去して調査を終了した。また、令和元年12月24日から翌年1月31日まで平成30年度調査と令和元年度分の一部の整理作業を行った。

令和2年度

令和2年度は遺構の残存する可能性が高いと想定された井戸跡周辺の約71m²を対象に令和2年12月15日付で個別の現状変更計画書の承認を得た。その後、令和3年1月19日より遺構検出を開始し、2月9日に調査補助業務による実測および遺構確認のためのトレンチ掘りを開始した。3月9日に大分県文化課の井主事による

現地指導を受け、翌 10 日に空中写真撮影を行い、その後、16 日より重機による埋め戻しを実施し、23 日機材を撤去し調査を終了した。令和 3 年 2 月 1 日から同年 3 月 16 日まで平成 31 年度分と令和元年度分の一部の整理作業を行っている。

なお、残りの整理作業については、令和 3 年 4 月 12 日から開始、令和 4 年 6 月 14 日まで実施した。また、遺物実測等業務を令和 4 年 1 月 21 日～3 月 18 日、令和 4 年 12 月 23 日～令和 5 年 2 月 17 日に行い、報告書作成・編集作業は令和 4 年度に整理担当が実施した。

(2) 発掘調査の組織

平成 30 年度（2018 年度）発掘調査（以下、職名は当時のもの）

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 三吉眞治郎（日田市教育委員会教育長）

調査指導 山路康弘（大分県教育庁文化課副主幹）

調査統括 梶原康弘（日田市教育庁文化財保護課長）

調査事務 安岡佳克（同主幹 埋蔵文化財係担当統括）

長祐一郎（同主査）行時桂子（同主査）若杉竜太（同主査）上原翔平（同主任）

調査担当 今田秀樹（同主査）

発掘作業員 河津モリ 加藤祐一 合原建國美 小暮裕次 財津真弓 坂本隆 坂本由紀子 羽野鑑将
宮崎芳信 森山敬一郎

平成 31 年度（令和元年度／2019 年度）発掘調査・整理作業

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 三吉眞治郎（日田市教育委員会教育長）

調査統括 宮本達美（日田市教育庁文化財保護課長）

調査事務 安岡佳克（同主幹 埋蔵文化財係担当統括）

河津秀樹（同主幹／7 月～）水嶋武彦（同主査／4 月）長祐一郎（同主査）行時桂子（同主査）

上原翔平（同主査）樋口かおり（臨時職員）

調査担当 今田秀樹（同主査）

発掘作業員 河津モリ 合原建國美 財津真弓 坂本隆
坂本由紀子 谷口芳枝 羽野鑑将 宮崎芳信
森山敬一郎

整理作業員 鮎部みか 梅野和恵 佐藤忍 吉田里美

令和 2 年度（2020 年度）発掘調査・整理作業

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 三吉眞治郎（日田市教育委員会教育長）

調査指導 井大樹（大分県教育庁文化課主事）

調査統括 吉田博嗣（日田市教育庁文化財保護課長）

調査事務 矢野登士太（同 主幹 埋蔵文化財係担当統括）

井上純（同主査）原田弘徳（同主査／～9 月）行時桂子（同主査）矢羽田幸宏（同主査／10 月～）

上原翔平（同主査）

調査担当 今田秀樹（同主幹）

調査員 河津モリ 合原建國美 財津真弓 坂本隆 坂本由紀子 谷口芳枝 羽野鑑将 宮崎芳信



調査風景 1（平成 30 年度）

森山敬一郎

整理作業員 梅野和恵 佐藤忍 吉田里美

令和3年度（2021年度）整理作業・報告書作成作業

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 三吉眞治郎（日田市教育委員会教育長）

調査指導 吉田寛（大分県立埋蔵文化財センター課長）

調査統括 吉田博嗣（日田市教育庁文化財保護課長）

調査事務 渡邊隆行（同主幹 埋蔵文化財係担当総括）

行時桂子（同主幹）井上純（同主査）

矢羽田幸宏（同主査／～7月）

田中敏子（会計年度任用職員／9月～）

整理担当 上原翔平（同主査）

整理作業員 佐藤忍 吉田里美

令和4年度（2022年度）整理作業・報告書作成作業・報告書印刷

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 三吉眞治郎（日田市教育委員会教育長）

調査統括 吉田博嗣（日田市教育庁文化財保護課長）

調査事務 渡邊隆行（同主幹 埋蔵文化財係総括）

行時桂子（同主幹）井上純（同主査）

田中敏子（会計年度任用職員）

整理担当 上原翔平（同主査）

整理作業員 佐藤忍 吉田里美



調査風景 2 (平成31年・令和元年度)



調査風景 3 (令和2年度)

II 史跡の環境と歴史

(1) 日田市の地形と環境

日田市の地形は盆地を形成しており、市街地である標高80m前後の沖積面を中心に、周囲には標高約150mの阿蘇4火砕流の溶岩台地、その外周には標高約200～600mの耶馬溪火砕流の溶岩台地、さらに外輪を標高400～1,000m級の山々と、遠方に久住山や阿蘇外輪山が広がる。これらの山々を源とする玖珠川や大山川が盆地内で合流し、九州最大河川である筑後川（日田盆地内では三隈川と称される）となって西流して筑後平野へと流れ出している。また、日田市は北部九州のほぼ中心に位置し、各主要都市へと通じる道路の結節点の役割を果たしている。こうした交通網は、江戸期に整備された日田代官所を中心とした筑前・筑後・豊前・肥後などの旧国的主要地域を結ぶ官道に由来している。

(2) 日田市の歴史と史跡周辺の遺跡

史跡咸宜園跡が所在する日田市には旧石器時代から私塾咸宜園の存在した江戸時代に至るまで、数多くの遺跡が確認されている。

日田市で最も古い人類の生活の痕跡が確認されるのは、天瀬五馬台地周辺において約3万4千年前の後期旧石器時代初頭頃に遡る。縄文時代には盆地周辺台地や小河川流域において遺跡が多数確認されるようになる。

弥生時代には、環濠集落などが多数確認され、なかでも、日田地域の中心的集落でもある吹上遺跡では、大型

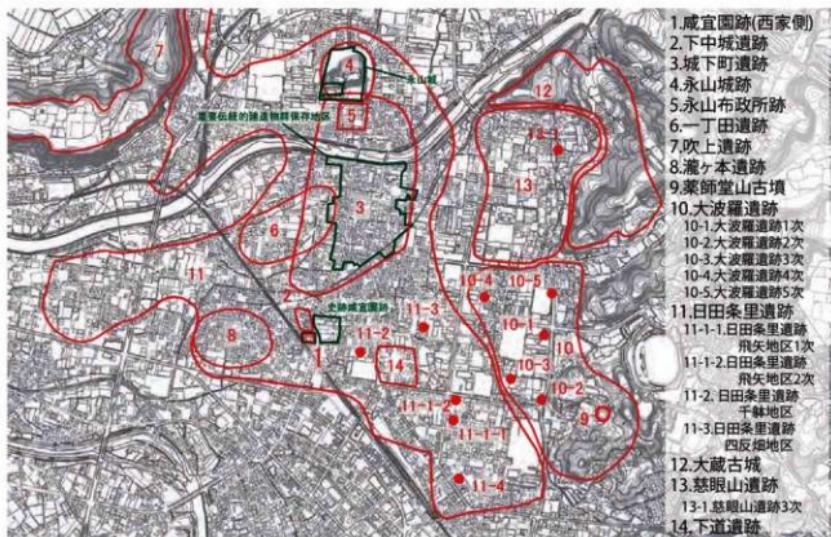
成人用豪棺墓群等とそれに伴う武器型祭器や装身具類などの副葬品が出土し、日田地域の拠点的な集落の支配者層の集団墓地と考えられている。

古墳時代には吹上遺跡から国内最古の豪族居館とされる小追辻原遺跡へと拠点が移る。後期になると穴觀音古墳・法恩寺山古墳3号墳・ガランドヤ古墳1・2号墳などの装飾古墳群が築造される。

律令制下の古代日田郡では、大型建物列等が出土した大波羅遺跡は官衙、「大領」銘のある青磁が出土した小追辻原遺跡は郡司館、道路跡や『豊馬豊馬』と線刻の入った石製品が出土した上野第1遺跡は「石井駅」の候補地とされている。

11世紀前半に、水田開発に伴って台頭した大蔵氏は、鎌倉時代には地頭職を安堵されて御家人となり、日田氏を称した。16世紀前半には日田氏が滅亡し、八郡老支配の戦国時代を経て、大友氏改易に伴い文禄2年(1593)に太閤蔵入地となる。

日田の近世は、宮本長次郎が日田・玖珠の代官として、日隈城を築き、その城下町として隈町が成立したことになります。続く、慶長6年(1601)には代官小川光氏が月隈山に丸山城を築き、その城下町として城の東側に丸山町が成立し、元和元年(1615)の一国一城令の頃には日隈城は廃城となつたとされる。その後、石川主殿頭忠総が日田藩主になる元和2年(1616)には丸山城を永山城と改め、丸山町を城の南側に移して豆田町と称すことになります。永山城が廃城となり、日田代官所支配となってからは、この両町には、多くの商人が集うことになります。幕府直轄地の支配石高が10万を超えて郡代に昇格すると九州の政治の中心となつた。代官所の権威を後ろ盾とした金融資本「日田金」を元手に代官御用達商人が九州諸藩の大名連相手に金融業(掛屋)を営むことで、日田は大いに経済発展を遂げることになった。こうした町人を中心とした経済発展は、多くの文人を輩出し、日田の文化が栄えたことで成宣園が成立する素地が整えられた。



第1図 史跡周辺の遺跡地図 (1/20,000)

史跡周辺の遺跡（第1図）

史跡咸宜園跡を含む日田市街地は、三隈川沖積地上に形成されているため治水が悪く、このような低地には遺跡は存在しないと長い間考えられてきた。しかし近年の発掘調査によって、沖積地でも微高地では集落跡が発見されており、沖積微高地である咸宜園跡周辺にも多数の遺跡が存在しており、以下、概観する。

咸宜園跡の周辺には、縄文時代から古墳時代の包含層が確認された瀧ヶ本遺跡(8)や弥生時代後期の集落が確認された下中城遺跡(2)、北側の豆田町西には沖積地上に弥生時代後期から古墳時代の集落が確認された一丁田遺跡(6)、弥生後期の溝が確認された日田条里飛矢地区2次調査(11-1-2)等の弥生時代の遺跡が多数見られる。

古墳時代では、大波羅丘陵の南斜面には中期の円筒埴輪が出土した薬師堂山古墳(9)のほか、後期の集落が確認された日田条里遺跡飛矢地区1次(11-1-1)と千軒地区(11-2)が所在する。

古代～中世においては、水田層が確認された日田条里遺跡四反畑地区(11-3)のほか、南東には古代の住居が確認された日田条里遺跡大原地区(11-4)、多くの木製品が出土した赤迫遺跡A地区がある。

このほか、官衙関連施設と推測されている大波羅遺跡(10)や、日田条里遺跡飛矢地区2次調査、慈眼山遺跡3次調査のほか、柵のような付属施設が確認された下道遺跡(14)が所在する。

中世には、大蔵氏の居城であった大蔵古城(12)とその眼下に広がる武家屋敷群の慈眼山遺跡(13)が所在する。

また、近世では、北には国の重要伝統的建造物群保存地区として選定された豆田町（城下町遺跡(3)）、県史跡の永山城跡(4)、西国筋郡代の陣屋であった永山布政所跡(5)が所在している。

（3）史跡の概要（第2図）

史跡咸宜園は、儒学者廣瀬淡窓が文化14年（1817）に開いた日本最大規模の私塾（漢学塾）である。淡窓は、天明2年（1782）に豆田町の豪商廣瀬家第5代当主三郎右衛門の長男として生まれたが、幼少の時分から病弱であったため、家業を弟の久兵衛にゆずり、文化2年（1805）24歳の時に豆田町の長福寺の学寮を借りて開塾した。その後、豆田の借家「成章舎」、文化4年（1807）には豆田裏町の「桂林園（桂林荘）」へと移り、文化14年2月に桂林園の建物を伯父月化の隠居家である秋風庵と通りを挟んだ敷地（西家）に移し「咸宜園」を開いた。

文政4年（1821）以降、秋風庵の前に東塾や講堂を建て、梅花塙や招懶洞、遠思樓などの書斎等を建設して、塾が最盛期を迎える。淡窓は、天保13年（1842）61歳の時にその功績から苗字・帯刀が許され、75歳の安政3年（1856）に死去し、咸宜園近くの長生園に葬られた。咸宜園の門下生の数は、全国88国から約5千人にもおよんだ。咸宜園跡の国指定範囲は道路を挟んで東西に分れ、東家が5.519.81m²、西家が1.128.05m²の合計6.647.86m²である。東家には居宅秋風庵、書斎遠思樓、閉塾後に建てられた書藏庫などが残り、西家は井戸跡が残るのみである。

現在、史跡指定地は日田市の所有になっている。



第2図 史跡周辺の地籍図（1/1,500）

III 発掘調査の成果

これまで東家で行われた発掘調査については、「史跡咸宜園跡秋風庵他保存修理工事報告書・発掘調査報告書」・「史跡咸宜園跡保存整備事業報告書」などで報告されている。調査の詳細については、以下の表に示すとおりである。

今回調査を行った範囲は、明治 22 年（1897）に日田郡役所、昭和 11 年（1936）に日田産業会館、昭和 51 年（1976）には大分県労働金庫が建てられるなど、閉塾や史跡指定以降様々な建物が増改築されてきた。そのため、平成 28 年度の用地取得まで発掘調査が実施出来なかっただけで、地下遺構の残存状況は不明であった。

そこで、対象範囲内での遺構の有無を確認するため、西家全面を調査範囲とし、遺構検出を基本として内容の確認を行った。ただし、検出された遺構が咸宜園に関する遺構かどうかを判断するため、状況に応じてトレンチ調査や一部半堀等を実施した。対象地は調査後に真砂土を敷いて埋め戻しを行った。

なお、本報告に関しては、調査担当者とは異なる整理担当者が報告を行っているため、遺構などについて一部事実誤認をしている可能性があるなど不十分な点があることをご了承いただきたい。

表 1 発掘調査一覧表

年次	調査年度	事業名・調査要因	調査目的	調査年月日	調査面積 (m ²)	主要成果
1 次	平成 4 年度	咸宜園跡地保存整備事業	遺構確認	1992/1001 ~ 1030	217.1	
2 次	平成 6 年度	史跡咸宜園跡保存修理事業	遺構確認	1994/0801 ~ 1995/0331	126.2	秋風庵
3 次	平成 7 年度	史跡咸宜園跡保存修理事業	遺構確認	1996/10/08 ~ 0329	541.5	心遠庵遺構
4 次	平成 8 年度	史跡咸宜園跡保存修理事業	遺構確認	1996/1203 ~ 1997/0331	216.8	井戸、心遠庵遺構
5 次	平成 9 年度	史跡咸宜園跡保存修理事業	遺構確認	1997/0910 ~ 1998/0127	313.1	井戸、洗場遺構、東側境界溝
6 次	平成 10 年度	史跡咸宜園跡保存修理事業	遺構確認	1998/0928 ~ 1999/0210	135	
7 次	平成 11 年度	国道 212 号柳電線地中化 水道埋設工事に伴う立会	工事立会	1998/1104 ~ 1999/0207	28.4	培塿、西側境界溝
8 次	平成 11 年度	日田桑原咸宜園地区発掘調査 (道路工事受託調査)	緊急発掘	1999/0728 ~ 1002	36.1	西側境界溝
9 次	平成 11 年度	史跡咸宜園跡保存修理事業	遺構確認	1999/0728 ~ 2000/0229	327.9	
10 次	平成 14 年度	史跡咸宜園跡保存修理事業	遺構確認	2002/0520 ~ 0829	266.8	豊穴遺構
11 次	平成 15 年度	史跡咸宜園跡保存修理事業	遺構確認	2001/0702 ~ 1125	1053	畠畝状遺構
12 次	平成 15 年度	市道成宜園跡改良工事	工事立会	2004/0217 ~ 0220	40.6	南側境界溝
13 次	平成 19 年度	史跡咸宜園跡記念物保存修理事業	遺構確認	2007/1227 ~ 2008/0331	49	梅花塙
14 次	平成 21 年度	咸宜園教育研究センター建設工事 に伴う立会	工事立会	2010/0202 ~ 0205	24.1	
15 次	平成 22 年度	史跡咸宜園跡総合整備活用 推進事業「東塾」等復元実施設計 に伴う立会	立会調査	2010/1118 ~ 1227	30.1	東側境界溝
16 次	平成 24 年度	史跡咸宜園跡保存整備工事に伴う 立会	工事立会	2012/1226 ~ 0225	118.1	水路状遺構
17 次	平成 25 年度	史跡咸宜園跡保存整備工事に伴う 立会	工事立会	2014/0127 ~ 0204	6.4	梅花塙基礎
18 次	平成 30 年度	重要遺跡確認調査（西家側）	遺構確認	2018/0821 ~ 2019/0325	436.3	
19 次	令和元年度	重要遺跡確認調査（西家側）	遺構確認	2019/0821 ~ 2020/0330	308.8	土坑
20 次	令和 2 年度	重要遺跡確認調査（西家側）	遺構確認	2020/1218 ~ 2021/0323	71.7	
				合計	4347	

第3図 発掘調査年次記述図 (1/1,000)



(1) 18次調査(平成30年度調査)(写真図版1、4)

調査地は、昭和51年に建築された民間施設の建物跡で、地下遺構の残存状況を確認する目的で設定した。

調査は、建物の独立基礎部分や地中梁を避けて行った。基本層序(第6図)をもとに埋没状況を確認すると、第1層は独立基礎や地中梁の影響により、コンクリート基礎周辺は少なくとも地表面から70cm程度の削平を受けた層で、独立基礎部分の周辺は、さらに深かった。第2層は上部に石灰が混じり固く、大小の円礫のほか、昭和期の遺物が混ざること、第3層にもコンクリート片が若干混じることから、閉塗以降の盛土造成であると判断した。焼土や炭化物を含む第4・5層については、第2層の昭和期以前の小土坑と考えられるが時期については、判然としない。その後、第6層上面で遺構検出をしたところ、弥生・古墳時代とみられる竪穴建物や溝状遺構、土坑や柱穴などを検出したことから、6層は古墳時代頃の遺構面と想定された。また、隣接する東家側の調査(7・8次)で確認された暗渠や東家西側境界などが標高85.2~85.3mで検出されている。これは、第2層の中位と同じ高さであることから、18次調査地内で成宜園の時代の遺構面は昭和期の改変を受けていると想定され、史跡に関する遺構は残っていないと判断された。

出土遺物は、弥生土器・土師器・石器と陶磁器類が出土し、多くが史跡に関連しない遺物のため、今回は掲載していない。史跡に関する近世後期の遺物は、第5図1・2のみで検出時に出土し、遺構に伴うものではない。

出土遺物(第5図)

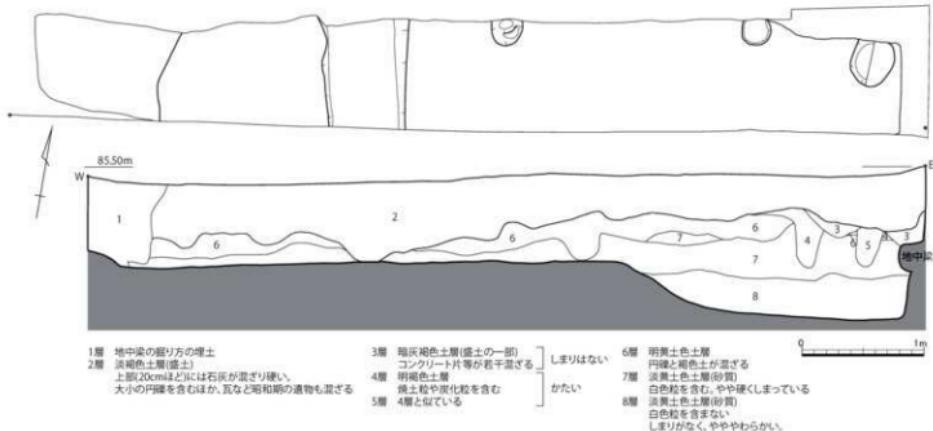
1は磁器の鉢である。2は磁器の猪口で胎土に黒色粒子が混じる。長崎県の亀山焼の可能性がある。



第4図 18次調査位置図(1/2,000)



第5図 18次調査 出土遺物(1/3)



第6図 18次調査 土層確認トレンチ平面図・土層断面図(1/40)



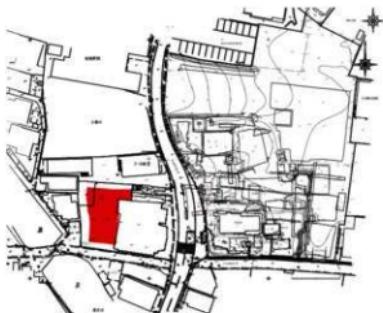
第7図 18次調査 遺構配置図 (1/150)

(2) 19次調査（令和元年度調査）(写真図版2)

調査地は、18次調査の西側の建物による擾乱の影響が少ないと想定される場所に設定した。

基本基層（第10・14・18図）をもとに堆積状況を確認すると、1トレンチ第1～4層、2トレンチ土層①第1～5層、1トレンチ西壁第1・2層などが現地表面から約30～45cmの厚さで堆積しており、近代以降の造成土と判断された。

1トレンチ第5～8層、第10～12層、1トレンチ西壁第3層などで炭化物が混じる層を確認し、1トレンチ第9層、2トレンチ上層②第3層で後述する土坑の埋土を確認していることから、咸宜園時代の検出面は1ト



第8図 19次調査位置図 (1/2,000)

レンチ10・11層、2トレンチ4層上面と想定される。また、トレンチ以外の調査範囲については、2トレンチ

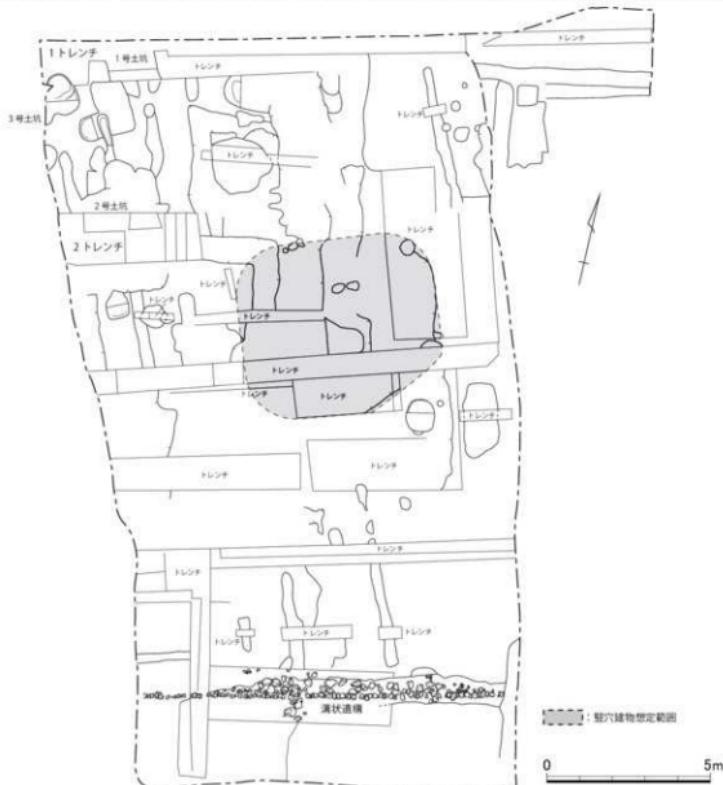
土層①第3層まで掘り下げて遺構検出を行っているが、一部で2トレンチ土層②第1層上面の咸宜園の時代と想定される面の上面で留めている部分がある。その結果、今回の調査で遺構として確認できたのは、1トレンチ第3層の下層で検出された咸宜園時代の可能性のある土坑と近代以降の造成土とみられる濃黄褐色土層を掘り込む形で検出した咸宜園時代以降の溝状遺構（第20図第3層）、そして1トレンチ14層上面で検出された弥生時代後期の竪穴建物などがある。

土坑

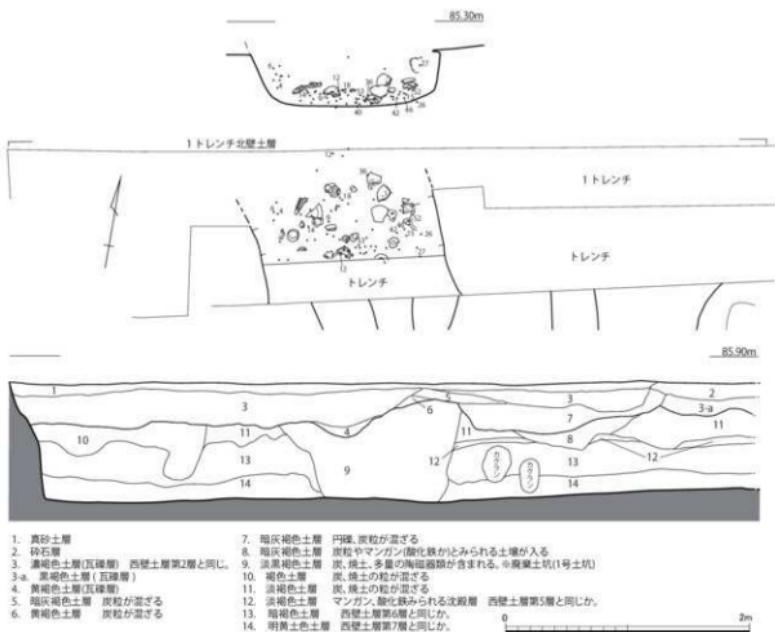
調査区の北西側で検出された3基の土坑で、検出状況や土層断面などから円形や椭円形であったと想定される。出土遺物が18世紀後半から19世紀中頃までの遺物が大半で、咸宜園が運営されていた近世後期から明治期に大半が取り、咸宜園の時代の前半以前のものと想定される。

1号土坑（第10図、写真図版6）

調査地北西隅で検出された土坑で、調査地北側に設定した1トレンチを掘り下げる過程で検出し、南側については未検出のため、全体規模は不明である。確認できる範囲で東西約1.5m×南北1.0m+αの規模を測り、



第9図 19次調査 遺構配置図 (1/150)



第10図 19次調査 1号土坑及び1号トレンチ平面・土層断面図 (1/40)

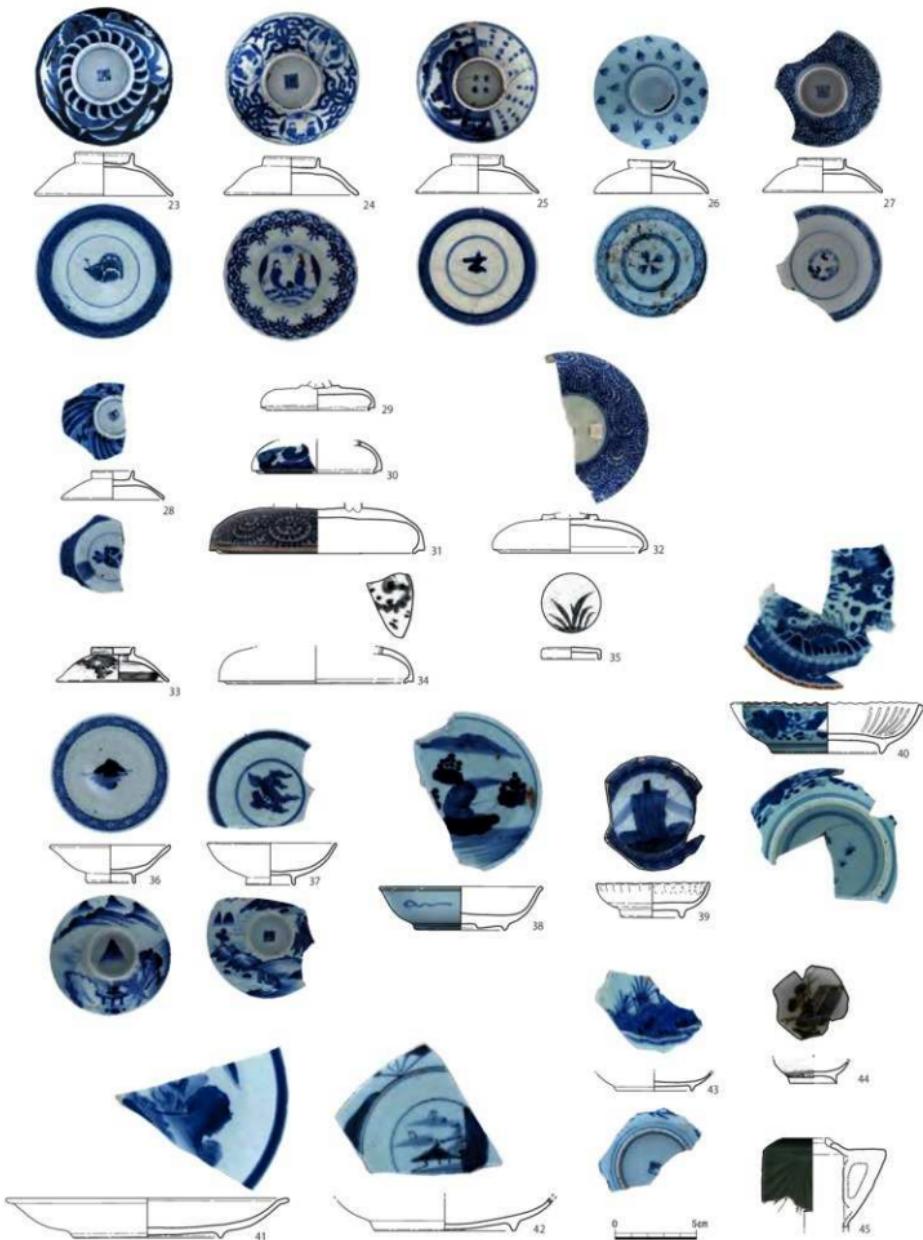
確認できる深さは約70cmである。単一層の埋没土である9層の上下全体に多量の陶磁器類が出土し、焼土や炭化物も含まれており、この土坑の埋没過程は非常に短かったものと思われる。

出土遺物 (第11~13図)

1は肥前磁器亀山焼の染付碗で、うがい茶碗である。ほぼ完形で見込みには山水文が施される。2は肥前磁器の染付碗で全体の約3分の1程度残る。外側には唐人が描かれ、見込みの上部には紗綾形が施される。3は肥前磁器の染付碗片で、端反りの湯呑である。外側には五七調の歌のような文字が描かれる。4は肥前磁器染付のくらわんか碗である。外側は丸に斜線文と丸文、見込み部分に圓線とコンニャク印判の五弁花纹が施される。5は肥前磁器の染付碗とみられ、ごくわずかに端反りがある。全体の1/2程度の残存率で外側に鶴と樹木、見込み上部にも樹木が描かれる。6は肥前磁器染付碗の湯呑である。外側には格子文が施される。7は肥前磁器染付碗で6と同じく湯呑である。染付の鉄絵で外側に描かれた松の幹の部分が鉄絵である。8は肥前亀山焼磁器染付碗でうがい茶碗である。ごくわずかに端反りがあり、外側は波文、見込みは波に鰐と思われる図柄が描かれる。9は肥前磁器染付碗で器壁が直線的に立ち上がる広東碗である。外側に簡略的な山水文と思われる図柄を描く。10は肥前磁器の染付碗で胴部下半が残存し、見込みには馬が描かれている。亀山焼とみられる。11は肥前磁器色絵。皿か。底部のみの破片である。見込みの圓線の内側に緑色の釉で菊花が施され、外側には意匠は不明だが朱色と青色も使われた絵が見られる。12は肥前磁器染付碗で広東碗である。9と比べやや大ぶりで外側に山水文を描く。13は肥前磁器染付のそば猪口である。高台部分を欠く。外側に蓮の花が描かれている。14は国産陶器碗で、九州系陶器で見込みに蛇の目剥ぎを施す。内外面に緑釉がかかり、見込みにはいっちゃん掛けが施され



第11図 19次調査 1号土坑 出土遺物1 (1/3)

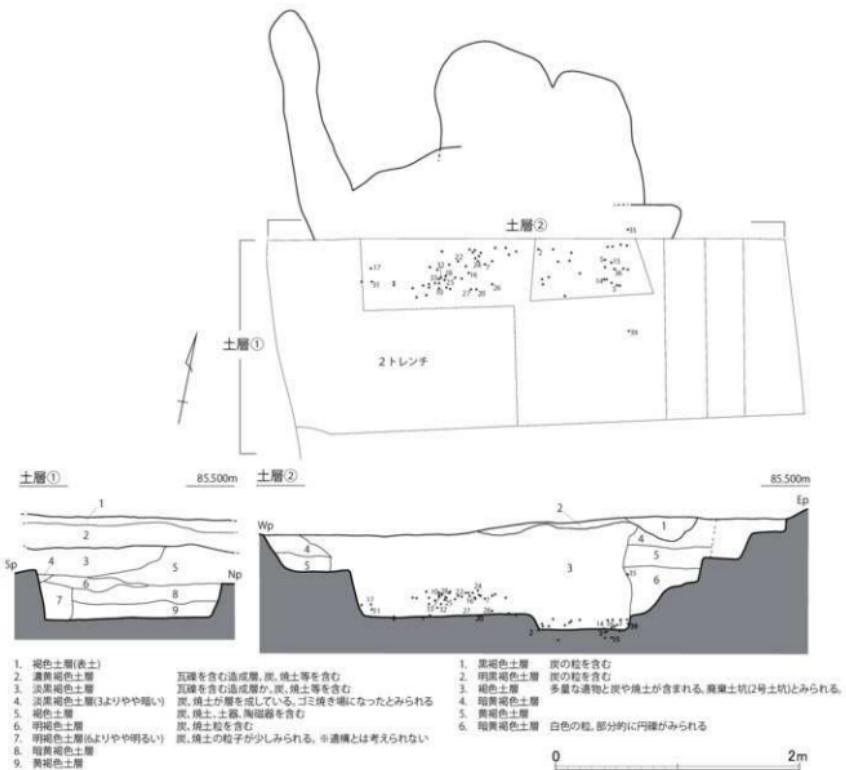


第12図 19次調査 1号土坑 出土遺物2 (1/3)



第13図 19次調査 1号土坑 出土遺物3 (1/3)

る。15は肥前磁器染付碗で、3分の1程度欠損する。内面に茶色いシミがつく。鉄分か。外面は山水文、見込みにも文様が施される。16は肥前磁器染付碗、底部のみが残る。外面は蛸唐草と雷文が描かれる。内面は團線の中に松竹梅の丸文が施される。17は肥前磁器染付碗で外面ほぼ全体に蛸唐草文が施される。16とほぼ同じ意匠だが、高台の形状が異なる。18は国産陶器小杯。関西系陶器、信楽系か。19は肥前磁器染付けの端反り碗である。外面は孔雀とみられる図柄が描かれる。内面は雷文と團線、山水文を描く。20は肥前磁器色絵碗で口縁部分に端反りがある。内外面に源氏香を模したような文様と花の文様があり、花文には金彩を施す。21は肥前磁器染付碗。外面には漢詩とみられる文字が書いており、内面には上端に墨弾きで文様が描かれる。22は肥前磁器染付碗で外面は綾杉文や渦巻文が全面に施され、内面は上端に雷文が描かれる。23は肥前磁器染付蓋。端反りの蓋、亀山焼か。内外面ともに山水文が描かれる。内面は墨弾きで文様が描かれる。24は肥前磁器染付端反りの蓋である。人物と唐草文が描かれる。撮み端部は釉がかっておらず、わずかに砂が付着する。25は23、24と同じく肥前磁器染付端反りの蓋である。26は肥前磁器染付蓋。他の蓋に比べ厚みがあり端部が丸い形状になっている。撮み部分も開き気味に立ち上がる。内面全体に砂の付着が見られる。27は肥前磁器染付蓋。端反りの蓋で蛸唐草文が全体に施される。28は肥前磁器染付蓋でごくわずかに端反りか。内面に墨弾きで模様が描かれる。



第14図 19次調査 2号土坑及び2号トレンチ平面・土層断面図 (1/40)

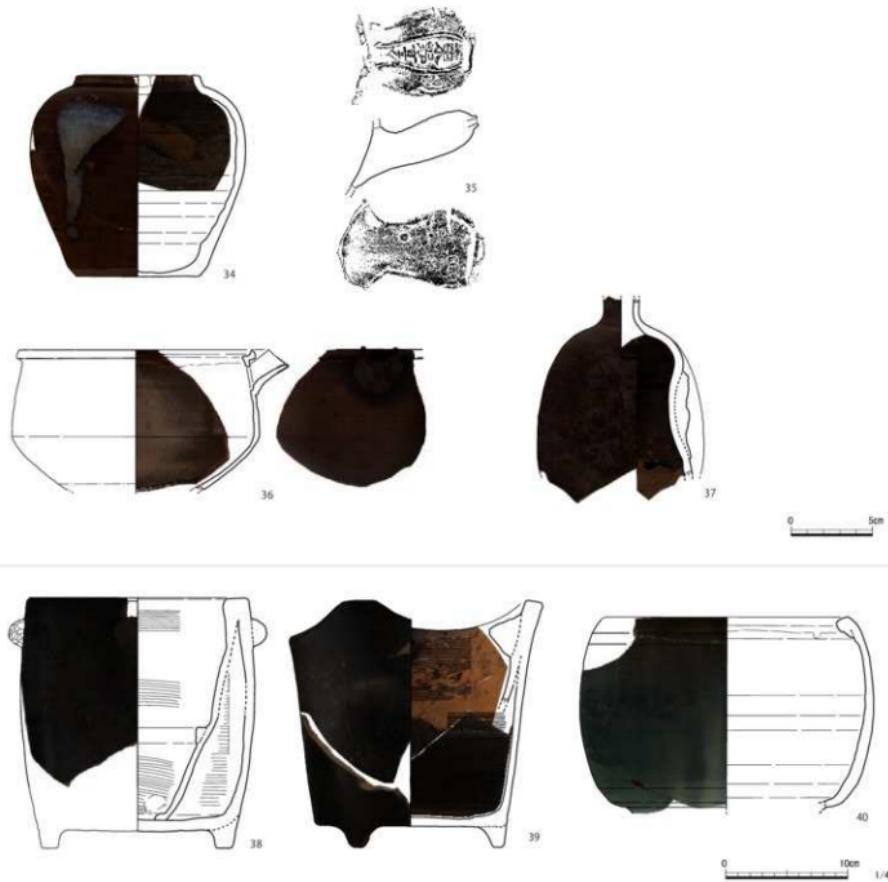
23から28の時期はいずれも19世紀前半から中頃の時期である。29は肥前磁器染付蓋。撮み部分が欠損する。花文が施される。30は肥前磁器染付蓋片。時期は29と同時期とみられる。31は肥前磁器染付蓋。段重の蓋で撮みが取れる。端部が露胎で全体に砂が付着する。32は肥前磁器染付蓋。段重の蓋である。33は肥前磁器染付蓋で端反りの蓋である。34は肥前磁器染付蓋片。段重の蓋である。35は肥前磁器合子蓋。内外面ともに丁寧に釉を施す。36は肥前磁器染付碗。端反りの碗である。内外面ともに山水文が施される。蓋の可能性がある。37は肥前磁器染付碗。ごくわずかに端反り。同じように外面に山水文を施し、内面に馬の模様の深い碗も出土している。38は肥前磁器染付皿。蛇の目四形高台をしている。見込みは帆掛け舟と山水文が描かれる。39は肥前磁器染付皿。輪花形で見込みに帆掛け舟と山水文を描く。40は肥前磁器染付皿。輪花形で口縁端部に口銘を施す。見込みに龍が描かれ高台内に・年製の銘が入る。41は肥前磁器染付大皿。時期は18世紀後半から19世紀中頃。見込みに山水文を施す。42は肥前磁器染付大皿。41と同時期で、圈線の中に山水文、外に扇の絵が描かれている。43は肥前磁器染付皿。高台内に銘款のような文字が描かれている。44は肥前磁器色絵小杯。見込みの色絵には金彩が施される。外面高台上に雷文が描かれる。45は青磁瓶である、三田青磁の可能性がある。46は肥前磁器染付鉢。細かい輪花形の鉢で見込みは山水文と雲形が描かれる。47は肥前磁器染付鉢。八角形の鉢とみられ、内面は植物の葉が、外側は菱形文を描いている。48は肥前磁器染付鉢。六角形の器形とみられる。内面は墨書きが施され、植物の葉のような文様が区画されるように配置される。49は肥前磁器染付の仏飯器である。唐人が描かれている。50は国産陶器徳利である。小鹿田焼の茄子徳利でいっちゃん掛けが施されている。底面に「→」



第15図 19次調査 2号土坑 出土遺物1 (1/3)



第16図 19次調査 2号土坑 出土遺物2 (1/3)



第17図 19次調査 2号土坑 出土遺物3(1/3)

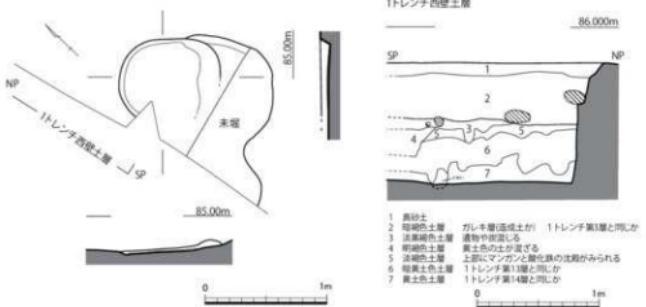
加湊」の墨書(写真図版11)がみられる。51は国産陶器徳利で小鹿田焼もしくは小石原焼の可能性がある。底面に円相様の墨書が見られる。52は石製の硯である。赤間硯。時期不明。石材は輝緑凝灰岩。53は瓦質土器の火鉢である。時期、産地ともに不明。

2号土坑(第14図、写真図版6・7)

1号土坑よりやや南で検出された土坑で、2トレンチを3層まで掘り下げる過程で検出した。南側の3層下部は未検出であること、また平面での遺構検出作業を行ったが、複数の遺構とみられる埋土が混在していたため、全体のプランを確認することは出来なかった。確認出来る規模は、東西約2.5m×南北1.8m+αの楕円形を呈すると想定され、深さは約80cm+αを測る。埋土は第3層の単一層で全体的に多量の陶磁器類が出土しており、また炭化物や焼土が多く含まれていることから、1号土坑と同様に埋没過程が非常に短かったと想定される。

出土遺物(第15~17図)

1は肥前磁器染付碗。広東碗。内面に囲線と文字を意匠とした文様がほどこされる。2は肥前磁器染付碗また

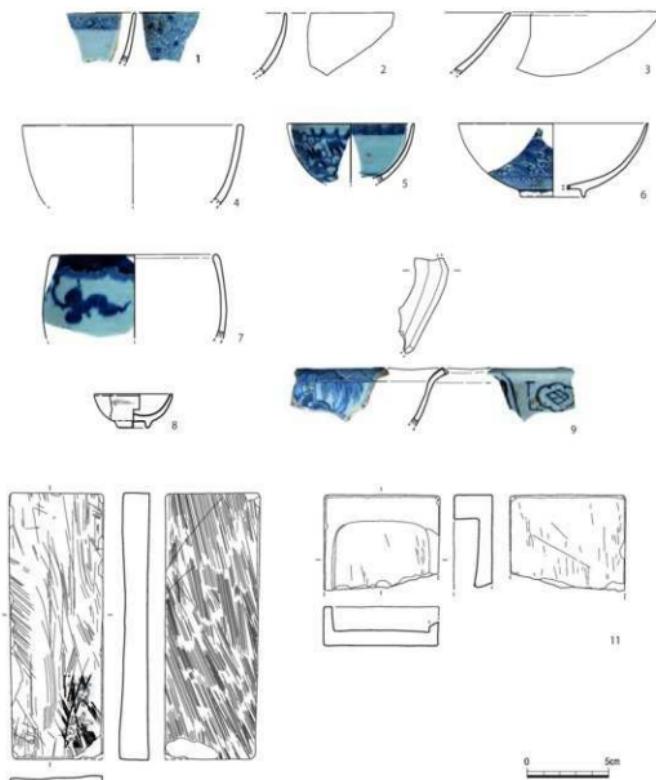


第18図 19次調査 3号土坑 平面・土層断面図、1トレンチ西壁土層断面 (1/40)

は鉢、輪花碗で口縁端部に口説が施される。外面は菱形文が描かれる。3は唐津陶器鉢、輪花鉢で全体に褐色の釉の上からいっちゃん掛けを施す。4は肥前磁器染付碗片。5は肥前磁器染付碗片、小ぶりの碗である。6は肥前磁器染付碗片、輪花碗で内外面にうすく貫入が見られる。7は肥前磁器染付碗。やや端反りのある碗で内面は墨弾きの文様が描かれる。亀山焼か。8は肥前磁器染付碗。外面に鯉の絵が施される。9は肥前磁器碗、内外面とも全体に釉をかけるが高台疊付け部分は露胎である。10は肥前磁器染付碗で端反りである。外面には龍と雲が描かれている。亀山焼か。11は肥前磁器染付碗。内面は口縁部分に四方擋が帶で描かれ、見込み部分には團線のなかに外面にも描かれる草花文が見られる。12は肥前磁器染付碗、内面の口縁端部は釉剥ぎが施されている。13は肥前磁器染付鉢、輪花碗で六角形の器形か。14は肥前磁器染付碗。わずかに端反りの碗。外面に海辺の景が描かれる。15は肥前磁器染付鉢、外面には雲の絵が描かれる。16は肥前磁器染付皿、輪花皿で内面に墨弾きが施される。疊付け部分は露胎である。17は肥前磁器染付碗、高台が欠損している。外面は草花文と雷文様の文様が施される。18は肥前磁器染付碗。端反り碗で内面に目痕が2カ所ある。内外面ともに細かい貫入がある。19は肥前磁器染付碗。紅皿。ごくわずかに端反り。外面に「大坂(新町お世)紅」の文字が描かれる。20は陶器鉢。産地、時期とも不明。内外面ともに鉄軸が施される。底面に「〇山〇イ」の墨書きがある。21は肥前磁器染付鉢。八角形の鉢で蛇の目凹形高台である。内面は墨弾きで文様が描かれる。22は九州系陶器鉢。外面高台部分に砂が付着する。疊付けは露胎。内面はいっちゃん掛け、見込みは蛇の目釉剥ぎが施される。小鹿田、または小石原か。23は肥前磁器染付鉢。蛇の目凹形高台。24は肥前磁器皿で蛇の目高台を持つ。25は肥前磁器染付蓋。やや端反りで外面にはうさぎが描かれる。26は肥前磁器染付蓋。端反りの蓋、亀山焼か。27は肥前磁器染付蓋。28は肥前磁器青磁蓋。段重の蓋か。29は肥前磁器染付蓋。段重の蓋か、外面天頂部に砂付着、撮みの周りに墨弾きで文様がえがかれる。30は肥前磁器染付蓋、やや端反り。31は肥前磁器染付蓋。端反りの蓋、撮みの端部は露胎である。32は陶器蓋、産地不明。土瓶の蓋か、ロクロ成形で外面は鉄軸が施される。33は陶器蓋、産地、時期不明。ロクロ成形で外面は青磁軸がかかる。撮み部分はつまみ寄せて州浜のような形になっている。34は陶器壺、産地不明。外面鉄軸がかかり、蓋灰釉も付着する。35は陶器土瓶把手。「東野亭」の銘が陽刻され、周辺にも植物の意匠が施される。36は陶器急須、産地、時期不明。薄手で釉薬が薄くかかる。37は陶器德利。人形徳利で布袋さまが貼り付けられており、鉄軸がかかる。38は瓦質土器焜炉、産地不明。おそらく方形で蓋や横穴のかわりになるよう内壁が付く。把手に菊花のスタンプ文が付く。39は瓦質土器焜炉、産地不明。内壁が付くが欠損、脚が3つ付く。胴部に雲形のスタンプ文。40は陶器火鉢、産地・時期ともに不詳。ロクロ成形で外面に青磁軸が薄くかかる。内面は下地釉のみ施釉される。脚がつく可能性がある。

3号土坑 (第18図、写真図版7・8)

調査区北西隅で検出された土坑で、平面検出を行ったが南側のプランが判然とせず、西側の一部は調査区外に

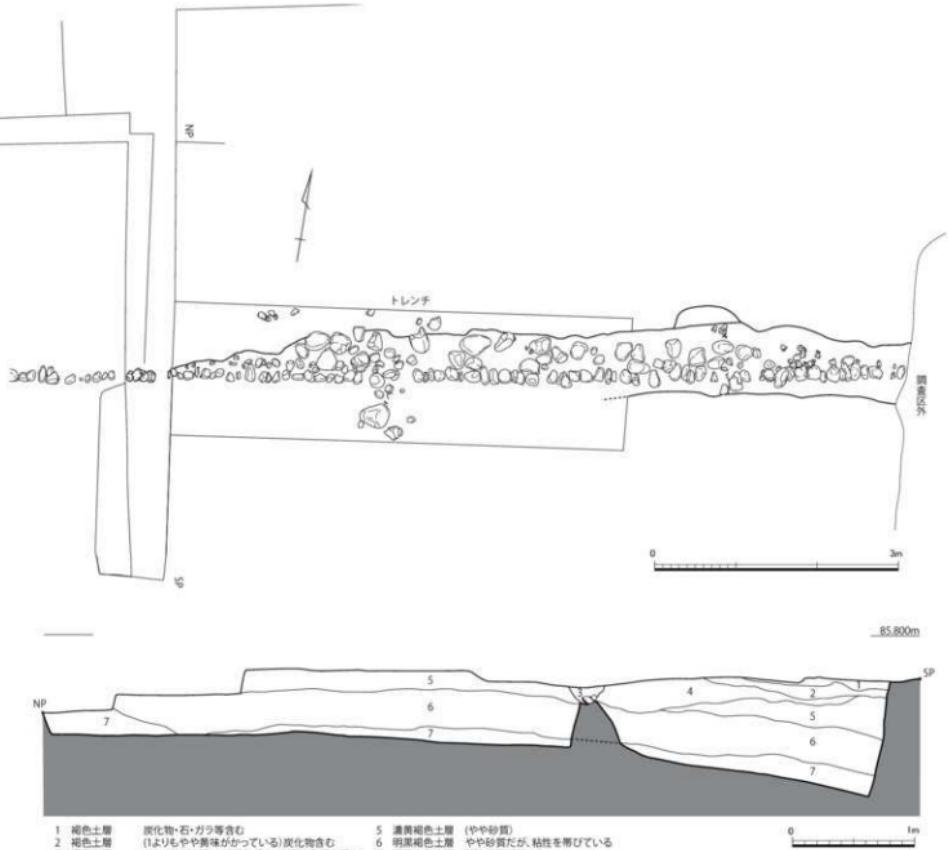


第19図 19次調査 3号土坑 出土遺物 (1/3)

延びることから全体の平面形状は不明である。確認できる範囲で南北約0.8m+α×東西0.8m+αを測り円形を呈すると考えられる。1トレンチ西壁第4層に対応している可能性が考えられ、その場合、深さは約20cmを測る。また、この土坑からは出土遺物として、咸宜園の門下生として名前が残る「謙敬」という人物名が刻まれた砥石(第19図10)が出土している。

出土遺物(第19図)

1は肥前磁器染付碗。口縁部片で内面に四方禪文、外面には小さい円に小花が配される文様が全面に施される。2は肥前磁器染付碗。口縁部片で1と同じ文様。3は肥前磁器染付碗。端反りの碗で口縁部片が残る。内面に雷文、外面は山水文が施される。4は肥前磁器染付碗。口縁部片で外面に花文が施される。5は肥前磁器染付碗。端部が尖る。外面に植物の文様、内面白縁部に文様が描かれる。6は肥前磁器染付碗。外面に山水文と連弁が描かれる。7は肥前磁器染付碗。外面に植物の文様が描かれる。8は肥前磁器染付紅皿。釉薬が厚めで外面に雲形のような文様が描かれる。9は肥前磁器染付鉢。輪花鉢で八角形か。10は石製品砥石。石材は砂岩で、産地、時期ともに不詳。表、裏面とも擦り跡が多くみられる。表面右下側に「謙敬」の文字が彫られる。持ち主の名前と思われる。11は石製品硯。石材、産地、時期いずれも不詳。海の部分のみ残る。



第20図 19次調査 溝状構造平面 (1/60)・土層断面図 (1/40)

溝状構造 (第20図、写真図版8・9)

調査地南側で東西に延びるように検出された東西に延びる溝状構造で、埋土中に石列が確認される。全体の延長は調査区まで伸びているため不明であるが、東西方向に約7.4m + αで幅は約30cm + αを測り、断面形状はU字型を呈している。幅については、平面検出では確認できなかったが、土層から埋土である第3層と4層が同一のものとの可能性があり、同一のものである場合、幅が1m以上広がことになる。石列は、南側に面をそろえるような意識がされた並び方がみられるものの、大きさが不揃いで所々に隙間も目立つ。出土遺物は、陶磁器などに混じり近現代の瓦などが石列の中から出土している。

また、この溝状構造を境にして南に向かって緩やかに傾斜する第7層は、古代の地山の可能性が考えられる。しかし、その上層である第5・6層ではほぼフラットになっていることから、対象地周辺は、古代以降に現在と同じ高さまで堆積したものと思われる。

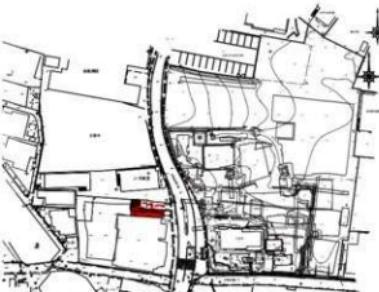
(3) 20次調査(令和2年度調査)(写真図版3)

調査地は、18・19次で未調査であった「咸宜園の井戸」として後世まで残されていた範囲とその付近に設定した。

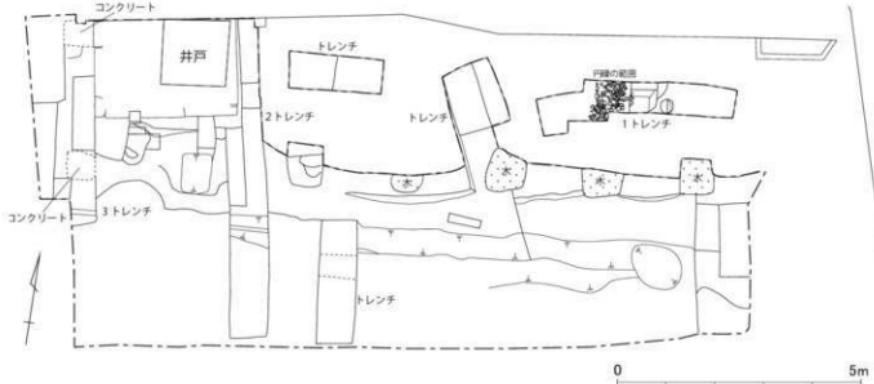
「咸宜園の井戸」周辺に2・3トレンチを設定し、史跡に関連する遺構の有無を確認する調査を実施した。

調査の結果、南側のほぼ半分程度は、民間施設の建物基礎及びその掘り方(土層①第3層)で、その北側では複数の配管(土層①第1・2層)により、咸宜園の時代の地山面とみられる土層①第4層は大きく破壊されているとみられ、咸宜園の時代の遺構は確認されなかった。

また、建物による搅乱を受けていないとみられる北側の範囲については、現地表面の数cm下で、円碟交じりの範囲(第22図1トレンチ)を確認したが、その下位から、縄文時代、弥生時代、近世の遺物のほかに、近代や現代の遺物が含まれていたことなどから、近代から現代にかけてのものであると想定される。なお、咸宜園の井戸と言われる井戸周辺に設定したトレンチ(第24、25図)からは、井戸の縁石とそれを据えるための土、そして、井戸を掘った際のものとみられる明黄色土と黒褐色土がまだに混じる層(土層①第5層、土層②第3～5層、土層③第4～6層)が確認され、土層①第4層上面が咸宜園時代の検出面と判断した。遺物が出土しているものの、明確な時期比定は出来ない。



第21図 20次調査位置図(1/2,000)

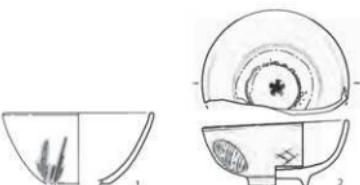


第22図 20次調査 遺構配置図(1/100)

出土遺物(第23図)

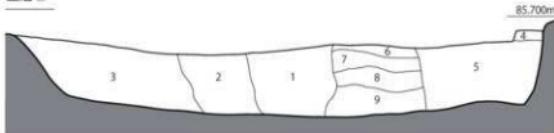
出土遺物は、縄文土器や石器、弥生土器や近現代の陶磁器や瓦、ガラスなどがみられた。近世後期の遺物である第23図1は1トレンチから出土しているが、遺構には伴わない。2についても検出時に確認されたものである。

1は、信楽系陶器碗。外面上に若松の文様を描く。小杉碗。高台を欠損している。2は肥前磁器染付碗。くらわんか碗。

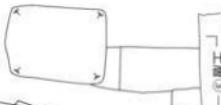


第23図 20次調査 出土遺物実測図(1/100)

土層①

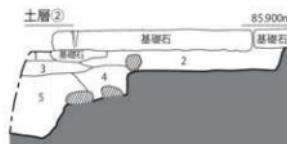


1. 配管時の埋土
2. 配管時の埋土
3. ろうきん種植物土
4. 淡黄色土層 小礫が混り、固くなっている
[土層②第3層と土層③第3層と同じ]
5. 明黄色土層 と黒褐色土層がまだらに混っている層
礫や遺物を含む(井戸を作った時のものか)
6. 淡褐色土層 粘土粒や砂利が混ざる
[土層②第3層と土層③第6層と同じ]
7. 淡色砂質土層 粘土粒や砂利が少しある
8. 黑褐色砂質土層 砂土粒が混れる
9. 明褐色土層 やや粘性をおびている



井戸

土層①



1. 黒褐色砂質土層(表土)
2. 黒褐色砂質土層 井戸の縁石をする際の土か
3. 淡黄色土層 小礫が混り、固くなっている
4. 黑褐色土層 指跡大・拳大の円錐、黄白色の砂利を含む
5. 明黄色土層 と黒褐色土層がまだらに混っている層 磚や遺物を含む(井戸を作った時のものか)

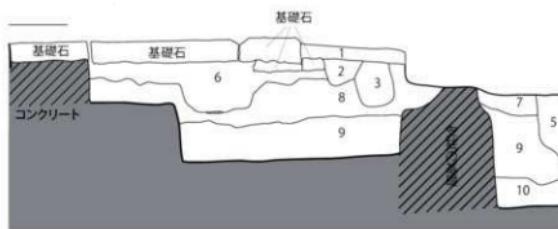
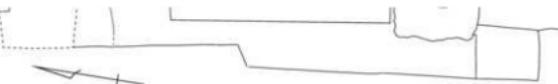
土層③



1. 黒褐色土層 表土・砂利を少量含む
2. 黑褐色土層 固くなっている
3. 淡黄色土層 固くなっている、円錐がならんでいる。
4. 黑褐色土層 固くなってしまったまだらの層
5. 黑褐色土層 固くなっている。
- 明黄色土層の土のかげで指跡大が少しあがまだらに入る。
6. 明黄色土層 と黒褐色土層がまだらに混っている層 磚や遺物を含む(井戸を作った時のものか)

第24図 20次調査 2トレンチ平面・土層断面図(1/40)

外面は丸に斜線文と丸文、見込一
み部分に圓線と印判による花文
が施される。砂目痕が丸く付着
する。



1. 淡黒褐色土層(砂利等含む表土)
2. 配管時の埋土
3. 積板の際の掘削痕か
4. 配管時の埋土
5. 淡褐色土層 炭や土器片含む
6. 淡褐色砂質土層 しまりがなく、遺物や灰が混ざる(井戸を作った時の埋土か)
7. 淡褐色土層 炭や燒土粒が混ざる [土層①第4層と同じ]
8. 淡褐色土層 炭や燒土粒を含む
9. 明褐色土層 炭や焼土粒を含む。8より粘性あり
10. 明褐色砂質土層 やや粘りがある

第25図 20次調査 3トレンチ平面・土層断面図(1/40)

IV 咸宜園西家に関する土地・建物等の文献等調査

(1) 経緯

平成 4 年から 15 年にかけて実施された、11 次に及ぶ重要遺跡確認調査などの内容をまとめた報告書(註1)や平成 15 年から平成 25 年までの史跡整備工事等に伴う 12・14~17 次調査の内容をまとめた報告書(註2)、書蔵庫移築整備に伴う 13 次調査の内容をまとめた報告書(註3)において、咸宜園に関する地下遺構の成果は概ねまとめられており、さらにこれらの成果や文献等の調査記録をもとに建築物等の変遷についても概ね整理されている(註4・5)。

これらの調査成果は東家敷地の史跡整備を主目的とする点から、咸宜園東家側の構造物調査に詳しく、現存する秋風庵や遠思楼以外に東塾・心遠廻(招隱洞)・梅花塙・講堂の位置などが推定されるとともに東家の範囲もほぼ確定することができている。一方で、本報告で対象とする西家には、廣瀬淡窓(以下淡窓)塾主時代の主要な塾に関する建造物や書斎などが存在しているものの、閉塾前後の段階で構築物がほぼ失われてしまっていることから、塾の範囲や建造物等に詳しく触れられて来なかつた。

そこで、西家側の本格的な発掘調査に先立ち、構築物の情報を復元する手がかりとするため、西家に関する土地や建物等の履歴調査を行つたものである。

表2 咸宜園西家土地等沿革表

年	月日	項目	地目 所有者 (地籍 (m) × 尺貫法表示)						登記簿	備考
			第番 (日田市淡窓 2丁目)		296-2 296-3 296-1 297-1 297-2 297-3					
明治 7 年?	-	-	田 草野忠右門外 4人所有							所有者は昭和 51 年管理報告の記載から
明治 22 年	5 月 7 日	譲與	部役所敷地 日田郡共有地 (704.44) 【7 番 4 町】		部役所敷地 同左 (631.4) 【6 番 11 少】				宅地変換 (田→)	小倉文「日田園長により片吉新築 (郡会議事堂「辨秀館」も新築)
大正 12 年	5 月 9 日	帰属	部役所敷地 大分組 (730.58) 【7 番 11 少】		部役所敷地 同左 (631.4) 【6 番 11 少】				明治 28 年 地日換地 地籍修正	大正 15 年都制施行 →町 号は郡制合・牛馬連合・裏面組合・木炭組合等の日田農業会が入る。
昭和 5 年	7 月 28 日	贈与			同左 (476.03) 【4 番 24 少】				分譲	内務省により分譲 (297-2・3) し。 東家側の境界部 154m 程が道路となる。
昭和 10 年	9 月 20 日	私下	各種田畠事務所敷地 日田郡農会・日田郡農業組合 (730.58) 【7 番 11 少】		同左 (476.03) 【4 番 24 少】				地目変更	昭和 11 年 4 月日田産業会館新築 (辨秀館) は日田町役場 (明治 34 年発足) →日田市役所 (昭和 15 年発足) の行合として 利用のため移築 (前述 200 勝) したと考えられる。】
昭和 18 年	11 月 29 日	贈与	各種田畠事務所敷地 日田市 (1/2)・大山村 (1/2) (730.58) 【7 番 11 少】		同左 (476.03) 【4 番 24 少】					
昭和 31 年	10 月 2 日	合算	土地 日田市 (1/2)・大山村 (1/2) (1206.61) 【365 坪】							
昭和 38 年	2 月 21 日	贈与	土地 日田郡農業組合 (1/3) 日田郡農業組合 (1/3)						道路 内務省 (42) 【13 歩】	
昭和 39 年	2 月 14 日	-	土地 大山村農業組合 (1/3) (1206.61) 【365 坪】						道路 内務省 (112) 【1 番 4 少】	昭和 51 年管理報告では 建物そのままで然から市に私下とある
昭和 41 年	9 月 13 日	売買	土地 日田市 (1206.61) 【365 坪】							
昭和 41 年	12 月 2 日	分譲	土地 日田市 (55.42)	土地 日田市 (115.19)					分譲	
昭和 43 年	3 月 24 日	売買		土地 日田地区生活協同 (1087.10)					細則 国土調査	地積訂正 550.6.23
昭和 51 年	3 月 22 日	分譲	土地 日田市 (50.47)	土地 日田地区生活協同 (95.26)	土地 日田地区生活協同 (99.184)				分譲	昭和 50 年 6 月日田産業会館建物取り壇し
昭和 51 年	3 月 26 日	売買		土地 大分組労働金庫 (99.184)					合算 国土調査 路由	昭和 51 年大分組労働金庫と日田地区労働組合が建物建設
平成 4 年	8 月 25 日	合算	土地 日田市 (53.8)	土地 大分組労働金庫 (1074.25)						地積訂正 548.25
平成 15 年	10 月 11 日	合併		土地 九州労働金庫 (1074.25)						市土地公有化、建物解体 (平成 28 年 11 月 28 日)
平成 28 年	9 月 29 日	売買		土地 日田市 (1074.25)			平成 18 年開闢			

(2) 西家敷地の変遷

西家の土地・建物に関する変遷を登記簿等の記録から整理したのが表2である。この敷地は廣瀬淡窓が桂林園から塾を移転するにあたって、文化13年（1816）以前に叔父月化の居宅（現在の秋風庵）の西側にある元酢屋勘助所有の畠地を新たに買い求めたもの（註6）で、確認されうる最も古い記録では296と297番の2筆（7畝4歩、6畝11歩）に分かれていた。



第26図 史跡成宜園跡周辺旧字図（1/200）



第27図 現字図と旧字図比較図（1/2,000）



第28図 西家境界付近発掘調査図（1/400）

この西家は、明治 7 年（1874）の第 4 代塾主廣瀬林外の訃報に際して、咸宜園改革案を記した第 3 代塾主の廣瀬青邨の「咸宜園改革に付き思考」によれば、建物・土地を含めてすべて売却すべきと示されている（註7）。咸宜園は中断を挟んで明治 12 年（1879）から明治 30 年（1897）まで塾主を変えながら維持されるが、西家の土地・建物は明治 7 ～ 12 年の中断期間などに売却されていたものと思われる。少なくとも明治 22 年（1889）5 月段階で草野忠右衛門外 4 名の所有地から日田郡共有地として売却されて日田郡役所が建設されている。その後この敷地（296 番 [730.58m²] と 297 番 1 [420.50m²]）は大分県所有時の昭和 7 年に史跡指定されるものの、日田郡養蚕業組合や日田市、大山村、日田地区生活協同組合や大分県労働金庫に売却されることとなる。こうした過程の中で、分合筆を繰り返し、現在、296-1、2 の 2 筆の構成となっている（註8）。

さて、この土地の変遷で注目されるのは、昭和 5 年に 297 番地が道路用地として分筆されていることである。国道 12 号線（現市道御幸通り線）拡幅に伴って 297 番地が枝番 1・2・3 に分筆され、297-2・3 番地が道路用地（154 m²）となっており、第 26 図・第 27 図のとおり旧字図ではかなりの部分が道路上に譲渡されていることがわかる。したがって、本来の咸宜園西家の東側境界は現在の道路上であると推測され、第 28 図に示す通り、平成 11 年に国道 212 号線電線地中化水道埋設工事に伴い発掘調査を行った第 7 次調査により発見された時期の新しい溝として紹介されている溝が位置的にも咸宜園西家の東側敷地境界を示した溝であったと推測される。これは昭和 10 年の日田郡役所前の写真 4 に写る塀などの構築物の痕跡とも合致するものと思われる。

また、咸宜園の建築物は明治 22 年には 296 の 2 番地に残る井戸を残して、日田郡役所と郡会議事堂「鐘秀館」が建築される。大正 15 年の郡制廃止に伴い郡庁舎には日田勧業会が入ることとなり、昭和 11 年には郡役所は解体されて日田産業会館が新築（写真 5）されることとなる。なお郡会議事堂は日田町役場や日田市役所の建物として移築されたものと考えられる（註9）。その後、産業会館は昭和 51 年の大分県労働金庫建築時に解体撤去され、その労働金庫も平成 28 年土地公有化に伴い解体撤去されることとなるのである。



写真4 日田郡役所写真（史跡調査報告書転載）



写真5 産業会館写真（廣瀬恒太氏撮影）

（3）西家の建造物と史資料調査

先にも述べたが、咸宜園は前身となる桂林園から移転することで開塾するが、その移転先は新たに取得した土地である西家であった。塾の建築について、淡窓は日記（註10）に細かく残しており、咸宜園開塾に関する建造物の記録を確認することができる。これら日記のなかから、建造物に関する記述を整理（註11）したものが表 3 である。なかには細かな間取りなどや建築期間などが記載されており、詳しい状況を確認することができる。

これによれば、文化 14 年（1817）2 月に居宅西塾を約 2 ヶ月かけて新築している。玄関 6 頃・書院 6 頃・炊飯処 6 頃・納戸 6 頃の 1 階と飛鴻樓や遠思樓と呼ぶ 6 頃間、のちに夕佳樓と呼ぶ板間 6 頃の間取りで、文政 9 年（1826）には東南隅に約 1 月かけての間に淡窓（絵図では吹万洞）と呼ぶ書斎 2 頃を追加している。これらを推定した間取り図が第 29 図である。

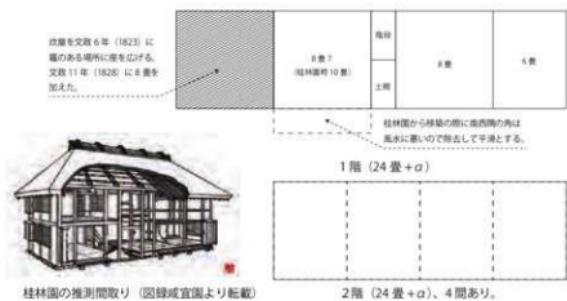
表3 咸宜園西家建造物関係記述一覧表①

表4 戒宣園西家建造物関係記述一覧表(②)

年号	月	日	トピック	記事	出典	
文化 15 年 (1818)	1	19	別荘移転	「御廬」(美しいまど)に移った。(居室を「御廬」に移した。)	戒宣園日記	
	5	15	造思程堅工事	本日、樓(二階)の壁に漆張り替えた。この仕事を屯に頼んだ。	戒宣園日記	
	5	17		5月17日 樓上の壁張り替えが終わる。	戒宣園日記	
	6	25		雨軒の木板(活版)完成。	戒宣園日記	
	6	26	造作工事	武家の敷石(活版)完成。	戒宣園日記	
	7	29		樓上(二階)の壁を改めて張った。	戒宣園日記	
	9	27		西塾の築地(活版)完成。	戒宣園日記	
	2	9		井戸掘り(鑿井)をこの日に始めた。	戒宣園日記	
	2	16	井戸他完成	井戸掘り(鑿井)はこの日に終る。	戒宣園日記	
	5	13 ~ 23		井、堀、屋が全て完成了	戒宣園日記	
	6	22	西塾北は石置	物の北の面(石置)を修理する。	戒宣園日記	
文政 2 年 (1819)	6	12		井戸の石が落ちてしまったので、しかし実は井戸掘りの職人か手抜きで作った。堅くさめぬかい仕事をしなかったからである。	戒宣園日記	
	7		井戸掘り	人を雇って再び井戸を掘った。	戒宣園日記	
	8			放学(休業) (井戸掘りの準備のため。)	戒宣園日記	
	9			井戸掘りは、本日で終了した。	戒宣園日記	
	12			水谷寺の塔を移して、井戸の塔を替えた。	戒宣園日記	
	12	22	居の移動	この日、戒宣園を樓下(一階)の雨軒(雨の家の)西より(西廻)の室に移した。職人が来て屋根を葺きかえた。二日間。	戒宣園日記	
	12	27		居所を西廻に移した。内も外も大掃除した。夜、秋風南にひって、画堂を食べた。	戒宣園日記	
		29		西塾が狭くなってしまったので、新しく書棚を建てようという話になった。本日は日がよいので、久玄衛門が職人をつれてきて、秋風南の北に縦張りして、浴始前に一つの柱を立てた。	戒宣園日記	
	3	5	東塾建屋と西塾からの生徒移動	新築の工事は既に進んでいた。名を東塾となす。いて毛筆を講義した。内外の学生三十余人を集めて、酒をふるまい高成の祝いをした。	戒宣園日記	
	8			もうちらん講義はすべて東塾で行つことにした。西塾は食事をしたり、休息するのみの所とした。	戒宣園日記	
文政 4 年 (1821)	4	23		生徒二十二人を東塾へ移した。西塾は残ったからである。	戒宣園日記	
	6	25		東塾に所々書き生を西塾に移して、一つにした。人数が減少したからである(夜宿、宿たり、休むことは從前通り。)	戒宣園日記	
	10	25		西塾の廻の改修。	戒宣園日記	
	11	7		益田を招いて西塾へ参拝をした。西塾の新しい廻が出来上がった。	戒宣園日記	
	2	24	西塾名前と引越	東塾生徒を本校廻上(二階)に移した。橋の名を名づけて東橋とした。西塾の橋を名づけて西橋とした。	戒宣園日記	
	12	26		東橋廻の生徒をすべて西塾に移した。	戒宣園日記	
	1	17		西塾の生徒数を増やして西塾と南廻に移した。生徒数が減少したからである。	戒宣園日記	
	5	29	西塾の吹揚塵刷	北廻の生徒をすべて東塾と南廻に移した。生徒数が減少したからである。	戒宣園日記	
	10	27		他の吹屋を改めることとし、日記に見えたる、宿すまで其事無かららず。定めて今度屋なるへ。本西塾の西北隅に立進ぬたり。火の炎がある以て、改めの火の東側に立て、土塗作りにせり。西廻のあり所は、庵を広めて、揮数量をしきり。	戒宣園日記	
				西廻の吹屋を壊して新居を本日から始めた。	戒宣園日記	
文政 6 年 (1823)	4	21	用水路建設	本日、新築(新用木水路)の水が通った。門生に見てて見させた。私は右腹が引きつかりながら痛かったので、家から用水路の末端が東家の廻屋の外に来たのを見た。	戒宣園日記	
		22		用水路の勢が良くなり、腰に回る。腰代(腰痛)を解消する。腰代の東廻を号せし時、腰山に山をうつて、其縁を舟舟り、腰代に至りて之に間に開けた。窓の名とせり。	戒宣園日記	
				腰代が楽美し、腰代居る。腰代の東廻を號せし時、東廻に立ち寄った。私は父とともに迎えてお目にかけた。	戒宣園日記	
文政 8 年 (1825)	4		腰廻建設	一つの腰廻を新設せんと立進て、其腰を久保屋にて。久保屋甚に腰廻として、前後一月程にして、成武せり。由今西家の東廻の廻に在る腰の小屋なり。前後腰舟を号せし時、腰山に山をうつて、其縁を舟舟り、腰代に至りて之に間に開けた。窓の名とせり。	戒宣園日記	
	4	21		腰廻が楽美し、腰代居る。腰代の東廻を號せし時、東廻に立ち寄った。私は父とともに迎えてお目にかけた。	戒宣園日記	
文政 9 年 (1826)	4			年賀(桂十二時)、水路西廻の廻に着いた。式の正位のもの初めてで、大家には恥をなからか、村人皆が笑った。【この日は丑の日であつた。前回の丑の日は火を燃れよとい。それは必ずしもだらうとは言えない。これからは、ぜひとも吹屋の家を改築して、火の炎を難題にしなければならぬ。】	戒宣園日記	
	6	21	吹揚塵場	西塾の吹屋の廻に起る。煙を費して暖めすることを借りた。村中の火、葵茎葉それ。煙よりして、明治に至りて其事成れり。	戒宣園日記	
文政 11 年 (1828)	2	28	西塾吹屋屋根改修	西塾西廻の屋根が完成。《およそ八役を加え、これに先立ち瓶吹き坐の入塾を助ける。その二役を彼のために設けるもの》	戒宣園日記	
	天保 10 年 (1829)	8	11	西塾門	西塾の門が出来上がった。	戒宣園日記
	3	17		塾に進てる土地を見る。	通修録	
	3	24		版舟をおこなった。	通修録	
	3	25	新塾(向塾) 建築	新塾上廻。	通修録	
弘化 4 年 (1847)	4	21		新塾が完成する。	通修録	
	4	22		門下生14人を抱襟理に移す。(壁上)喫成する。樓下はまだ未完成。文之助を常侍史に罷免する。(新塾に移したため)	通修録	
	5	8		塾が完成。講堂・西廻に前門下生を移す。(講堂)人に西廻2人編まる。(樓上・樓下あわせて、およそ33人。(樓上16番、樓下17番、附蔵之美、織屋之次、講堂のなかでも一番である。	通修録	
嘉永 2 年 (1849)				西家の西に物を勧き、西塾と名づけ、秋風南の北に東塾を構へ。其の後に講堂を開けり。・後年に至り、其の東南に書室二宇を開き、心通気、成武、腰舟、百草園、夜宿、夜宿の廻に移す。成武の廻に移す。腰舟先生。書室を抱へ知堂門下生17人。腰舟の廻に移す。腰舟先生。腰舟と並んで、腰舟と並んで、各合長一を属く。東塾抱舟長、新塾抱舟長。三部は西塾の二室、三室に於す。・西家の北西、廻の東、腰舟より。腰舟成は吹屋に姓り、中庸を有する。その西傍、宿室を有り、日々之を焚くなり。・・・】	武六春著『馬糸一伊伊録』	
				房主による喜宣園の卒業(卒業式)の記述。	戒宣園日記	
明治 4 年 (1871)			戒宣園改修	林外が1600余りを投じて戒宣園整営の大改修を行う。(詳細不明)	塾経費	
				房主による喜宣園の卒業(卒業式)の記述。	戒宣園日記	
明治 7 年 (1874)			戒宣園改修	房主による喜宣園の卒業(卒業式)の記述。	戒宣園改修につき愚考	

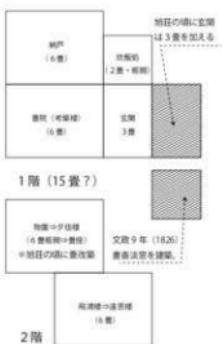
また、塾の建造物に関しては、文化14年（1817）に桂林園を解体移築している。桂林園の間取りを参考とするなら、1階6間間・8間間・10間間・8間間で2階が4間で、桂林園と異なり、西南隅の突出部を潰して長屋に近い形としており、その推測図が第30図である。そのほか、廻は文化14年（1817）の移築時に設置され、桂林園と同様であれば西塾北西隅に連なっていたと思われる。ただ、文政4年（1821）には廻を2週間ほどで建替えたことが記されているが、位置が変わったかは不明である。また、弘化4年（1847）には1月半程の期間を経て新塾を建築しており、1階17間、2階18間の建物であったと記されている。絵図等に見られる南塾にあたるものと思われる。また、明治4年（1871）には第4代塾主廣瀬林外が1600両余りを借用して塾の大改修を行っており、その際に大きく姿を変えた可能性があるものの詳細は不明である。

居宅と西塾以外には、当初は西塾に連なっていた釜屋（炊屋）を文政6年（1823）に土蔵として改築し、さ



桂林園の推測間取り（図録咸宜園より転載）

第30図 西塾間取り想定図



第29図 居宅間取り想定図



小栗布益田（大分県佐伯市吉教寺藏）※注4より転載

第31図 明治時代咸宜園絵図



長岡永徳画（公益財団法人廣瀬資料館蔵）※注4より転載

第32図 大正時代咸宜園絵図

らに火事への懸念から文政 11 年（1828）に独立して再築したと思われる。現在も残る井戸は文政 2 年（1819）に 4 ヶ月かけて作られ、石積崩落により文政 3 年（1820）に 6 か月かけて再築されている。また、通路である石置は文政 2 年（1819）に修理され、門は天保 10 年（1839）に設置されていることが分かる。

こうした文献資料のほかに建物の配置は閉塾後に描かれた絵図から当時の様子をうかがい知ることができる。第 31 図の咸宜園絵図（佐伯市善教寺蔵）は、明治 16 年（1883）に門下生の豊後戸次の真宗僧・小栗憲一（布岳）によって描かれた咸宜園の全容である。淡窓が建てた建造物のほか、僧家であった北塾や淡窓の墓所（長生園）が描かれている。小栗は弘化 4 年（1847）に入門し、嘉永 6 年（1853）に塾を離れており、墓所が描かれる淡窓没後の姿が含まれているが、咸宜園が最盛期を迎えていた小栗在塾時の様子を思い起しながら描いたものと想定される。特に西家には「西塾」、「南塾・南樓」、「遠思樓」（考槃樓）が描かれている。第 32 図の咸宜園絵図（廣瀬資料館蔵）は、大正 2 年（1913）に淡窓生誕 130 年を記念して日田で開催された「淡窓頌徳祭」の際にかつての門下生が終結し、最盛期の咸宜園の様子を語り合い、門下生の絵師長岡永邦によって描かれたもので、門下生たちの記憶に基づいた往時の姿を知ることができる。特に西家には居宅の「考槃樓」と書齋「吹万洞」（淡窓）、「南塾・南樓」、「西塾・西樓」（冷翠館・瓊林館）、「釜屋・風呂・井戸・物置」の記載が見られ、明治 16 年絵図とほぼ同様の配置や構造物が描かれている。そのほか、門や石疊状の通路のほか、門脇には 1 間 × 2 間半ほど平屋建物、敷地北西隅には 1 間 × 3 間半ほど平屋建物も見られる。

表 5 咸宜園西家建造物詳細表

通称	名稱		建築・改築年	機能	建物規模		建築期間
	明治 16 年	大正 2 年			経年	日記	
居宅（西家）	1 間	考槃樓	文化 34 年（1817）建築 天保 2～7 年（1831～1836）改築	居室・書院	梁間 2 間 × 行 4 間（推定） 手書き一部廻縁（推定）	(15 個) 西南隅 4 間壁（書院） 玄関 1 間 × 6 間（天保改築） 西北隅 4 間（納戸） 廻縁 6 間（改築跡）	（約 2 ヶ月） 造成 1 ～ 4 日 柱材解体 2 日 棟上まで 6 日 延床 1 月程度
	2 間	渡辺樓・西家 青村先生寓此	西塾（文化 14 年） 改築（文化 14 年） 天保 2～7 年（1831～1836）改築	居室	梁間 1 間 × 行 4 間（推定） 手書き一部廻縁（推定）	(15 個) 東南隅 4 間（渡辺樓・遠思樓） 北西隅 4 上層板壁（兼 納戸 → ケ住 室）	（約 2 ヶ月） 造成 1 ～ 4 日 柱材解体 2 日 棟上まで 6 日 延床 1 月程度
西塾	付翼屋	—	吹万洞	書齋	文政 9 年（1826）	梁間 1 間 × 行 1 間（推定） 瓦葺平屋建（推定）	別荘東南隅に追加 2 間（詳細不明） 東北六間、八面間、土間・千戸 戸
	1 間	西塾	文化 14 年（1817）建築 文政 6 年（1823）廻縁設 置（文政 1 年） 改築	熱帯 南向合 門下生の食堂など 腰間	梁間 2 間 × 行 6 間（推定） 瓦葺平屋建（推定）	(4 個) 柱材解体 2 日 棟上まで 6 日 延床 1 月程度	
	2 間						
	付翼屋？ 付翼屋？	儒林館・合計	—	会計帳室？	2 間の別称？	—	—
	付翼屋？	冷翠館・和講	—	御講御室？	2 間の別称？	—	—
釜屋	—	—	釜	便所	—	桂林園と四種ならば、釜屋は西塾 北西隅に位置していたのか。 文政 4 年（1821）改築	—
	釜屋	釜屋	文化 14 年（1817）建築 文政 6 年（1823）移築 文政 11 年（1828）改築？	門下生の炊事場	梁間 2 間 × 行 6 間（推定） 瓦葺平屋建（推定）	当時は飯糰製造による酒落を西 釜屋で行っていた。 文政 6 年（1823）に西塾とは隣接 な東北側に独立して土蔵造を建設。 不明この土蔵を文政 11 年（1828）に改 築（火災発生により）	4 月 6 月（度日）
	風呂（並型附翼屋）	風呂	—	—	同上	—	—
井戸	—	井戸	文政 2 年（1819）改築 文政 3 年（1820）再築	—	梁間 1 間 × 行 1 間（推定） 瓦葺平屋建（推定）	石垣の内張き工事による酒落を西 井戸で行なった。 6 月（度日）	—
物置	—	井戸の西隣	—	—	梁間 1 間 × 行 3 間（推定） 手書き平屋建（推定）	—	—
井戸西側臨建物	—	—	—	—	梁間 1 間 × 行 1 間（推定） 手書き平屋建（推定）	—	—
門脇連廊	—	—	—	—	梁間 1 間 × 行 2 間（推定） 瓦葺平屋建（推定）	—	—
石置	—	石置	文政 2 年（1819）改築	—	—	—	—
門	—	—	文政 10 年（1839）設置	—	—	—	—
南塾	南塾・南樓	南塾（階下） 南樓（階上）	新塾	弘化 4 年（1847）建築 門下生の寄宿舎？ 茅葺 2 階建（推定）	梁間 2 間 × 行 6 間（推定） 茅葺 2 階建（推定）	—	（約 1 ヶ月） 造成 1 日 棟上まで 1 日 延床 1 月程度
北塾	北塾	—	北塾	文政 6 年（1823）増上	門下生の寄宿舎	—	長良庵開闢

表 6 戒宣園西家建造物消長表

出来事 名稱	1810年代	1820年代	1830年代	1840年代	1850年代	1860年代	1870年代	1880年代
1階	1817 考望樓		玄閣改築					
居宅(西家)	1817 2階		旭往					
付属屋		1826 淡室		吹万閣				
西塾	1817 2階		電気改築 電気8角閣					
付属屋?								
廻	1817 1821		廻体再築					
茶屋		1817 1823土蔵造						
風呂(兼湯廻風呂)			1826定塗					
井戸		1819 1820井渠						
物置								
月門西奥庭建物								
門脇建物								
石置	1819							
門			1839					
南塾				1847				



第33図 西家構造物変遷図 (1/700)

これら明治 16 年絵図と大正 2 年絵図は、若干時期がずれるものの、それぞれ咸宜園最盛期の状況を描いているものと思われ、居宅や西塾などの 2 階部分の表現や居宅付属屋の名称（吹万洞）などに若干の違いが見られるものの、記載されている建物に大きな齟齬はないと言えよう。

これらの構造物の詳細と消長を整理したものが表 5 である。絵図と日記の記載がばば合致することから日記の正確性を追認でき、建造物の詳細を概ね整理することができたと評価したい。

(4) 調査のまとめ

以上の調査成果を整理し、推定位置と変遷を記したのが第 33 図である。西塾と付属屋及び居宅（考槃樓）で構成されていた文政 14 年（1817 年）の当初期を経て、1820～30 年代には、文政 2 年（1819）の井戸、文政 4 年（1821）の東塾建築に伴う廻新築、文政 6 年（1823）の炊屋建築、文政 11 年（1828）淡窓建築などと、次第に施設が拡充している。これは、文政 6 年（1823）に西家北隣の長兵衛宅を間借り、塾生の寄宿舎「北塾」とした頃で、順調に拡大する咸宜園を象徴している。さらに、転機は弘化 4 年（1847）の南塾建築であり、この頃には月旦評から 200 名近くの塾生が在籍したことが分かっており、1840～50 年代の咸宜園最盛期の姿だったのだろう。絵図のどちらにも同じ建物が記載されており、輝かしい咸宜園の姿を留めている。

しかし、明治 4 年（1871）の大改築以降、当時の教育需要に合致しなくなったのか、第 4 代塾主林外の明治 7 年（1874）の死去に伴い西家売却が提案された後の 1890 年代以降、日田郡役所などを経て、構造物は現存する井戸を残すのみとなり、昭和 5 年には西家の一部が道路用地となり、昭和 7 年の指定を迎えるのである。その後も、咸宜園であったことを忘れ去られたかのように西家の咸宜園遺構は破壊され続け、今日に至っている。

以上の整理から、今後の取り組みにおいては、以下の点に注意する必要がある。

- ・史跡指定地は西家の敷地を正しく反映しておらず、東側は現在の道路下に境界があるものと推測される。
- ・塾舎の基礎関係工事は概ね短期間で、地盤改良（東塾は実施）等の可能性が高い。
- ・郡役所・産業会館・労働金庫・道路と閉塾以降、複数時期の新しい遺構を峻別する必要がある。

註 1 「史跡咸宜園跡秋風庵他保存修理工事報告書-発掘調査編」日田市教育委員会 2005

註 2 「史跡咸宜園跡保存整備事業報告書」日田市教育委員会 2016

註 3 「史跡咸宜園跡書庫保存修理工事報告書」日田市教育委員会 2009

註 4 「廣瀬淡窓の生家-廣瀬家の歴史と業績-」第 5 章 淡窓生家と咸宜園 第 3 節 史跡咸宜園跡の遺構

日田市教育委員会 2012

註 5 「廣瀬淡窓と咸宜園-近世日本の教育遺産として」第 1 章第 6 節 咸宜園の範囲と建造物 日田市教育委員会 2013

註 6 「史跡調査報告書 第 7 帽」「大分懸 咸宜園」文部省 1935

註 7 註 5 と同じ

註 8 註 2 の P9 では「指定地籍 8 筆 8 段 9 畝 15 歩 1 合 7 勅」や註 4 の P108 では「西家 2 筆(711 坪、424 坪)」と記載している。これは昭和 7 年、昭和 50 年代作成の指定書添付の地籍調書が土地台帳の「7 畝 11 坪と 4 畝 24 坪」を誤記したことが原因で、さらに原典を再照合せずに転載したことで生じた誤りである。そのため、面積齟齬があるとの指摘を行っているが、前述の通り原典の確認誤りが原因であり、昭和 7 年指定当時の面積は基本的に誤りではないことをここでことわっておく。

註 9 「日田市史」「第 2 章第 1 節 日清・日露戦争と町村」「第 4 章第 2 節 経済発展と統制の強化」日田市 1990

註 10 「淡窓全集」「懐旧樓草記・淡窓日記・遠思樓日記・鉄舟日・醒齋日・進修錄・再修錄・甲寅新稿」日田郡教育会 1925

註 11 日記中の意識と建築物に関する記述収集は原田弘徳氏の協力を得た。また、註 4 に記載の建物年表を参考に、建造物にかかる記載を再整理した。

V 総括

ⅢからⅣにかけて 18 次調査から 20 次調査の 3 回の発掘調査で得られた咸宜園の時代（1817～1897 年）に関する遺構・遺物並びに史資料調査の報告を行ってきた。以下では、その調査成果をまとめる。

発掘調査で確認された史跡咸宜園跡の時代の可能性が考えられる遺構は、19 次調査で検出された土坑 3 基のみであった。

土坑の形状は、不明な点が多いものの、1・2 号土坑は單一の埋土中に遺物だけではなく、炭化物や焼土が多く含まれていた。検出位置も西塾や南塾と想定される場所を避けて北西隅で検出されていることから廃棄土坑であったと考えられる。

時期は、大量に出土した磁器類のほとんどが端反り碗の時期（1810～1860 年）に収まるとみられ、これは淡窓塾主時期に収まっている。また、この頃は大量生産・消費の時代で、陶磁器類を長く使うというよりもすぐには廃棄していた時期と考えられ、咸宜園時代に利用された陶磁器を一括してこの場所に廃棄した可能性が高いと想定される。このほか、出土した磁器の中に龜山焼がみられる点も特徴としてあげられる。龜山焼は當時としては通常のものより少し高級品（注⑪）である。また、出土した磁器の種類として、碗などの生活雑器だけではなく、水滴など筆記用具として用いられていた道具や合子などが一定量みられる点も塾としての咸宜園の性質を示す資料である。個別の遺物で見ると 1 号土坑から三田青磁と考えられる瓶（第 12 図 45）、2 号土坑からは紅皿（第 15 図 19）が出土している。三田青磁は現在の兵庫県三田市でつくられた磁器、紅皿は「大阪新町お 笹紅」という当時の土産品である。このような通常よりもランクの高い陶磁器などは、塾生というよりも、塾主やそれに関係する人物たちによって使用されていた可能性を想定することができる。

更に、今回の調査では、3 号土坑から門下生の名前が入った砥石（第 19 図 10）が出土している。これまでの調査でも門下生とみられる人物の名前の入ったものや門下生に関連するとみられる寺の名前の入った硯は出土しているが、入門簿から名前を追うことができる人物の名前の入った遺物が出土したのは今回の調査が初めてである。

出土した砥石に彫られていた名前は「謙敬」（けんけい・けんきょう）とみられ、入門簿によると謙敬は觀祐という人物の紹介で文政 10 年（1827）1 月 21 日に入門している。出身地は、長門豊浦郡室津村（現在の山口県下関市豊浦町大字室津下）で、光蓮寺の僧侶とみられる。廣瀬淡窓を師事者としている。謙敬の塾での成績は、淡窓が晩年になって記録を整理した日記である『懐旧樓筆記』には「上等に至る。」と記され、また『欽齋日』の文政 12 年（1829）10 月 23 日の記事には「五等下。」と記されている。その他、人となりを知る記事としては、文政 12 年（1829）7 月 25 日の記事に「狂蕪（酒を飲み、ふしだらであった）者」として罰せられた 36 名の中に名を連ねている。その後、文政 13 年（1830）2 月 1 日に天瀬に向かった記録を最後に名前を確認することは出来ず、謙敬の退塾または大崩の時期などは明らかになっていない。

しかし、入門簿に記された人物の名前の入った遺物が咸宜園の時代とみられる廃棄土坑から出土しており、史資料と発掘調査の成果が合わさり、新たな咸宜園の様相を明らかにした点は非常に有意義な成果があったと言える。

18 次調査では、東家側の検出面よりも深い位置から造成土が堆積している状況が確認され、近代以降の変遷の影響を強く受けたため、咸宜園時代の遺構が残らなかったものと考えられる。しかし、19 次調査では、トレシチで掘り下げた場所以外について、一部で咸宜園時代の遺構面が残っている可能性が想定された。20 次調査では、井戸を造成する際の痕跡を確認し、その上面で咸宜園時代の可能性のある遺構面を確認した。

土坑以外に咸宜園の西家側を考える上で検討が必要な遺構として、19 次調査で確認された溝状遺構がある。

出土遺物から近代以降と考えられるが、咸宜園閉塾以降の建物に伴うもの可能性がある。

また、18・19次調査では、弥生時代後期頃から古墳時代の遺物や生活遺構が確認され、史跡周辺が微高地として既に当該期の居住空間であったことが判明したことでも一つの成果と言える。

このほか、建物の履歴調査から、西家側の指定範囲が本来の範囲を正しく反映していないことや、西家側の塾舎の基礎関係工事に関しては東家とは異なり、短期間で行われたことなどが判明した。

最後に、これまでの3回の調査と建物の履歴調査などからわかったことをまとめる。

- ・咸宜園の時代と考えられる近世後期の建物痕跡は、ほとんど残っていないものの、北西隅に廃棄土坑が確認され、咸宜園の時代の生活面が残ることが一部確認できた。
- ・土坑については、調査後の整理過程で確認されたもので、土坑が確認されたことにより各調査の咸宜園時代の遺構面については、18次調査が6層上面（第6図）、19次調査は2トレンチ土層①3・5層上面（第14図）、20次調査では2トレンチ土層④4層上面（第24図）となる可能性がある。特に19次調査のトレンチ以外の箇所は、咸宜園時代の遺構検出上面で留めている箇所があり、遺構が残っている可能性がある。20次調査も同様に北側のトレンチ以外で遺構面が残っている可能性があり、18次調査は後世の造成について、明確な時期の縦別が出来ておらず検討が必要である。
- ・土地や建物の履歴調査から塾舎などの状況は明らかになり、本来の西家側の東側の境界は、道路下部まで広がることが判明した。

註1) 大分県立埋蔵文化財センター吉田寛氏よりご教授を得た。

参考資料

渡道隆行編『史跡咸宜園跡 保存整備事業報告書』日田市教育委員会 2016

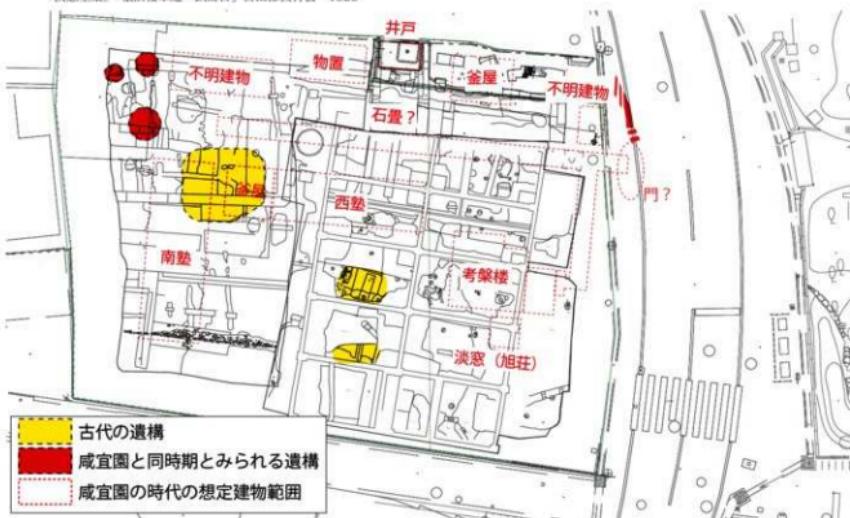
佐藤浩二「北九州市域の江戸後期における庶民向け陶磁器の流通」「江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通」

2006 九州近世陶磁学会

土居和幸・行時桂子編『史跡咸宜園跡秋風庵他保存修理工事報告書・発掘調査編』日田市教育委員会 2005

註2) 井上源吾『廣瀬淡窓日記』作玄書房 2005

『淡窓全集』『懐旧稿筆記・歎否日』日田市教育会 1925



第3.4図 西家側建物想定位置図及び遺構配置図 (1/350)

表7 出土遺物 観察表1

測定番号	出土遺物	種別	基盤	法量 (cm)	測定	出土	地城	地質	出土	地城	地質	出土	地城	
									上部	中部	下部	側面	側面	外観
第1回	1 19次 1号土器	縦扁	鉢	16.0	7.0	(6.0)	内面	外観	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面
第1回	2 19次 1号土器	縦扁	鉢	6.3	3.3	2.8	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	外海(高)
第1回	1 19次 1号土器	縦扁	鉢	14.5	6.0	-	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高層)
第1回	2 19次 1号土器	縦扁	鉢	(12.0)	5.0+e	-	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	3 19次 1号土器	縦扁	鉢	(7.4)	5.0+e	-	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	4 19次 1号土器	縦扁	鉢	11.0	6.3	(高)14.4	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	5 19次 1号土器	縦扁	鉢	(10.4)	5.8	14.0	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	6 19次 1号土器	縦扁	鉢	6.8	3.2	4.0	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	7 19次 1号土器	縦扁	鉢	7.3	5.45	3.1	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	8 19次 1号土器	縦扁	鉢	(14.0)	6.0	6.3	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	9 19次 1号土器	縦扁	鉢	(11.4)	6.8	(高)16.0	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	10 19次 1号土器	縦扁	鉢	-	4.8	(5.0)	(11.0)	縦扁、凸底	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面
第1回	11 19次 1号土器	縦扁	鉢	-	1.8+e	(6.0)	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	12 19次 1号土器	縦扁	鉢	(11.0)	5.8	-	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	13 19次 1号土器	縦扁	鉢	(7.1)	-	5.5+e	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	14 19次 1号土器	縦扁	鉢	12.0	4.0	5.1	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	15 19次 1号土器	縦扁	鉢	11.0	6.1	4.4	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	16 19次 1号土器	縦扁	鉢	-	4.3+e	(高)16.0	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	17 19次 1号土器	縦扁	鉢	(12.4)	9.7	6.0	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	18 19次 1号土器	縦扁	鉢	(14.0)	3.5	(2.0)	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	19 19次 1号土器	縦扁	鉢	12.8	7.5	5.6	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	20 19次 1号土器	縦扁	鉢	(10.0)	6.1	(4.0)	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	21 19次 1号土器	縦扁	鉢	(11.0)	4.1+e	-	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	22 19次 1号土器	縦扁	鉢	(11.2)	4.3+e	-	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	23 19次 1号土器	縦扁	鉢	11.3	3.6	(高)16.0	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	24 19次 1号土器	縦扁	鉢	15.8	3.2	(高)17.0	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	25 19次 1号土器	縦扁	鉢	10.1	3.2	(高)16.0	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	26 19次 1号土器	縦扁	鉢	5.4	2.8	(高)16.0	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	27 19次 1号土器	縦扁	鉢	9.0	2.8	(高)16.0	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	28 19次 1号土器	縦扁	鉢	(8.4)	2.4	(高)16.0	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	29 19次 1号土器	縦扁	鉢	-	1.5+e	(6.0)	縦扁、圓形	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面
第1回	30 19次 1号土器	縦扁	鉢	9.0	-	2.7+e	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	31 19次 1号土器	縦扁	鉢	(11.0)	3.8+e	-	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	32 19次 1号土器	縦扁	鉢	11.4	3.2+e	-	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	33 19次 1号土器	縦扁	小鉢	9.0	2.8	(高)16.0	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	34 19次 1号土器	縦扁	鉢	(14.0)	2.8+e	-	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	35 19次 1号土器	縦扁	鉢	4.8	1.0	-	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	36 19次 1号土器	縦扁	小鉢	9.0	3.1	(高)16.0	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	37 19次 1号土器	縦扁	鉢	(10.0)	3.4	(高)16.0	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	38 19次 1号土器	縦扁	鉢	(13.0)	3.6	7.5	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	39 19次 1号土器	縦扁	鉢	9.0	2.9	4.6	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	40 19次 1号土器	縦扁	鉢	(10.0)	4.2	6.2	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	41 19次 1号土器	縦扁	鉢	(13.2)	3.2	(12.0)	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	42 19次 1号土器	縦扁	鉢	-	2.7+e	(11.0)	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	43 19次 1号土器	縦扁	鉢	-	1.5+e	(6.0)	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	44 19次 1号土器	縦扁	鉢	-	1.5+e	2.8	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	45 19次 1号土器	縦扁	鉢	(15.0)	6.6	(5.0)	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	46 19次 1号土器	縦扁	鉢	(13.0)	6.3	(5.0)	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	47 19次 1号土器	縦扁	鉢	(10.0)	5.0+e	-	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	48 19次 1号土器	縦扁	小鉢	(5.0)	5.5+e	-	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	49 19次 1号土器	縦扁	鉢	-	1.0+e	(6.0)	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	50 19次 1号土器	縦扁	鉢	-	1.0+e	(6.0)	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	51 19次 1号土器	縦扁	鉢	-	1.0+e	(6.0)	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	52 19次 1号土器	縦扁	鉢	(26.0)	7.3	-	ナゲ	ナゲ	ナゲ	ナゲ	ナゲ	ナゲ	ナゲ	内面(高)
第1回	1 19次 2号土器	縦扁	鉢	12.0	6.5	-	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	2 19次 2号土器	縦扁	鉢	-	6.4+e	-	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	3 19次 2号土器	縦扁	鉢	-	6.2	-	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	4 19次 2号土器	縦扁	鉢	-	4.4+e	-	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	5 19次 2号土器	縦扁	鉢	(10.0)	4.5+e	-	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	6 19次 2号土器	縦扁	鉢	-	2.0+e	-	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	7 19次 2号土器	縦扁	鉢	(12.0)	4.2+e	-	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	8 19次 2号土器	縦扁	鉢	6.1	4.1+e	-	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	9 19次 2号土器	縦扁	鉢	9.4	9.0	4.5	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)
第1回	10 19次 2号土器	縦扁	鉢	(16.0)	5.4+e	-	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	縦扁	内面(高)

表8 出土遺物 檢察表2

採集番号	採取日	採取地	標本	量	計量 (cm)	性別	特徴	頭部	吻上	頭部	色調	
							内面	外面	内面	外面		
第1530	11 19-2	2号土坑	鱗眼	鱗	11.1	5.75	4.7	無鱗	無鱗	無鱗	淡灰	
第1530	12 19-2	2号土坑	鱗眼	鱗	9.95	5.4	4.65	-	無鱗、腹鰭	無鱗、腹鰭	淡灰	
第1530	13 19-2	2号土坑	鱗眼	鱗	11.5	7.0	6.55	-	無鱗、腹鰭	無鱗、腹鰭	淡灰	
第1530	14 19-2	2号土坑	鱗眼	鱗	12.8	6.7+	-	-	無鱗、腹鰭	無鱗	淡灰	
第1530	15 19-2	2号土坑	鱗眼	鱗	13.3	7.0	(7.2)	-	無鱗、腹鰭	無鱗	淡灰	
第1530	16 19-2	2号土坑	鱗眼	鱗	15.8	3.1	7.8	11.6	無鱗	無鱗、高鰭尾一側銀色	淡灰	
第1530	17 19-2	2号土坑	鱗眼	鱗	-	3.7+	a	無鱗	無鱗	無鱗	淡灰	
第1530	18 19-2	2号土坑	鱗眼	鱗	17.0	9.5	6.5	-	無鱗、口孔後	無鱗、腹鰭	淡灰	
第1530	19 19-2	2号土坑	鱗眼	鱗	18.0	4.0	5.8	-	無鱗	無鱗、腹鰭銀色	淡灰	
第1530	20 19-2	2号土坑	鱗眼	鱗	-	3.2+	a	無鱗	口孔後	無鱗	淡灰	
第1530	21 19-2	2号土坑	鱗眼	鱗	-	4.8+	a	無鱗	無鱗	無鱗	淡灰	
第1530	22 19-2	2号土坑	鱗眼	鱗	-	5.5+	a	無鱗	無鱗、口孔後	無鱗	淡灰	
第1530	23 19-2	2号土坑	鱗眼	鱗	13.0	3.6	-	(高鰭尾17.8)	無鱗	無鱗、高鰭尾一側銀色	淡灰	
第1530	24 19-2	2号土坑	鱗眼	鱗	13.0	3.8	-	(高鰭尾17.8)	無鱗	無鱗	淡灰	
第1530	25 19-2	2号土坑	鱗眼	鱗	-	4.8+	a	無鱗	無鱗	無鱗	淡灰	
第1530	26 19-2	2号土坑	鱗眼	鱗	-	3.8	3.0	無鱗	無鱗	無鱗	淡灰	
第1530	27 19-2	2号土坑	鱗眼	鱗	-	6.6	2.8	-	(腹鰭尾13.7)	無鱗	無鱗	淡灰
第1530	28 19-2	2号土坑	鱗眼	鱗	-	2.8+	a	無鱗	腹鰭	無鱗	淡灰	
第1530	29 19-2	2号土坑	鱗眼	鱗	10.0	3.0	-	(腹鰭尾11.6)	無鱗	無鱗、一側斑紋	淡灰	
第1530	30 19-2	2号土坑	鱗眼	鱗	9.5	3.0	1.0	(腹鰭尾13.8)	無鱗	無鱗	淡灰	
第1530	31 19-2	2号土坑	鱗眼	鱗	11.3	3.7	-	(腹鰭尾14.0)	無鱗	無鱗	淡灰	
第1530	32 19-2	2号土坑	鱗眼	鱗	9.3	2.7	4.1	-	無鱗	無鱗	淡灰	
第1530	33 19-2	2号土坑	鱗眼	鱗	10.0	2.3	3.8	-	ツバメ鼻一側銀色	無鱗	淡灰	
第1530	34 19-2	2号土坑	鱗眼	鱗	7.0	12.4	12.6	-	無鱗、腹鰭	無鱗	淡灰	
第1530	35 19-2	2号土坑	鱗眼	鱗	7.8	3.8	4.2	-	無鱗	無鱗	淡灰	
第1530	36 19-2	2号土坑	鱗眼	鱗	-	8.6+	a	無鱗、腹鰭	無鱗、腹鰭	無鱗	淡灰	
第1530	37 19-2	2号土坑	鱗眼	鱗	-	10.9+	a	自然鱗、口孔後	自然鱗	無鱗	淡灰	
第1530	38 19-2	2号土坑	口唇	丸鱗	17.8	20.5	13.8	口唇ナメ、腹鰭	口唇石、石塊、白	口唇	淡灰白色	
第1530	39 19-2	2号土坑	口唇	丸鱗	-	20.2	13.8	口唇ナメ、腹鰭	口唇石、口唇ナメ	口唇	淡灰白色	
第1530	40 19-2	2号土坑	口唇	丸鱗	19.7	15.8+	a	口唇ナメ	口唇石、口唇ナメ	口唇	淡灰白色	
第1530	41 19-2	2号土坑	口唇	丸鱗	-	4.1+	a	無鱗	無鱗	無鱗	淡灰	
第1530	42 19-2	2号土坑	口唇	丸鱗	-	6.2	2.8	2.4	無鱗	無鱗	淡灰	
第1530	43 19-2	2号土坑	口唇	丸鱗	-	(3.9 + a)	-	無鱗	無鱗	無鱗	淡灰	
第1530	44 19-2	2号土坑	口唇	丸鱗	-	13.0	4.0	-	無鱗	無鱗	淡灰	
第1530	45 19-2	2号土坑	口唇	丸鱗	-	10.0	4.0	4.0+	無鱗	無鱗	淡灰	
第1530	46 19-2	2号土坑	口唇	丸鱗	-	13.6	0.1	(5.1)	無鱗	無鱗	淡灰	
第1530	47 19-2	2号土坑	口唇	丸鱗	-	13.4	0.9+	a	無鱗	無鱗	淡灰	
第1530	48 19-2	2号土坑	口唇	丸鱗	-	6.2	2.8	(2.4)	無鱗	無鱗	淡灰	
第1530	49 19-2	2号土坑	口唇	丸鱗	-	4.8+	a	無鱗	無鱗	無鱗	淡灰	
第1530	50 19-2	2号土坑	口唇	丸鱗	-	4.4+	a	無鱗	無鱗	無鱗	淡灰	
第2330	1 20-2	1号土坑	1号鱗	鱗	-	-	-	-	無鱗	無鱗	淡灰	
第2330	2 20-2	1号土坑	1号鱗	鱗	-	12.0	5.5	4.8	蛇口鱗斑点	沙利氏	淡灰	

法量の単位はcm。○書きは、残存と復原を表す。

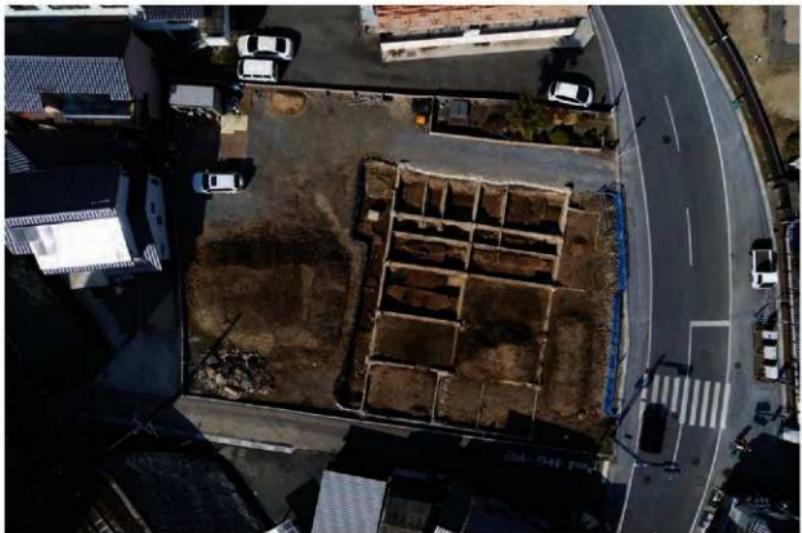
胎土：A角閃石 B石英 C長石 D赤色粒子 E白色粒子 F黑色粒子 G雲母 H砂粒

表9 出土遺物 觀察表3

地點番号	出土地點	被覆	土面	測量法	整備	石材	編考
第13番	11 (2) 2号土堆	石頭	鐵	長さ 8.5幅 5.3厚さ 1.3重さ 98.7 g		鐵錐	
第19番	10 (2) 2号土堆	石頭	鐵	長さ 16.4幅 5.7厚さ 1.8重さ 332.0 g	鐵錐	wet stone, 鉄錐, 鐵錐, 鐵錐	文字あり(鉛筆)か
第19番	11 (2) 2号土堆	石頭	鐵	長さ 5.5幅 2.9厚さ 1.2重さ 120.0 g		砂岩	



18次調査 空中写真 1 (上が北)



18次調査 空中写真 2 (上が北)

写真図版 2



19次調査 空中写真（上が西）



19次調査 調査地全景（東から）



20 次調査 空中写真（上が北）



20 次調査 調査地全景（西から）

写真図版 4



18次調査 土層確認トレンチ
(南から)



18次調査 土層確認トレンチ北壁
(南東から)



18次調査 土層確認トレンチ北壁
(南西から)



19次調査 1トレンチ
土層断面西側（南から）



19次調査 1トレンチ
土層断面西側（南から）



19次調査 1トレンチ
西壁土層断面（東から）

写真図版 6



19次調査 1号土坑
遺物出土状況（南から）



19次調査 1号土坑
遺物出土状況2（西から）



19次調査 2トレンチ土層①
土層断面（東から）



19次調査 2号土坑
遺物出土状況（西から）



19次調査 2トレンチ
土層断面（南から）



19次調査 溝状造構
検出状況（東から）

写真図版 8



19次調査 溝状遺構
土層断面（西から）



19次調査 溝状遺構
土層断面南側（西から）



19次調査 溝状遺構
土層断面北側（西から）



写真図版 10



20次調査 2トレンチ土層②周辺
土層断面（南から）



20次調査 2トレンチ土層①
土層断面（東から）



20次調査 3トレンチ
土層断面（西から）



図 11 - 1



図 11 - 8



図 12 - 36



図 11 - 14



図 11 - 18



図 11 - 19



図 12 - 23



図 12 - 24



図 12 - 31



図 12 - 44



図 12 - 45



図 13 - 52



図 13 - 50



図 13 - 53



図 15 - 19



図 13 - 50



図 16 - 21



図 16 - 24

写真図版 12



図 16 - 25



図 16 - 26



図 16 - 32



図 16 - 33



図 17 - 35



図 17 - 37



図 17 - 37



図 17 - 40



図 19 - 11



図 19 - 10



図 23-1



図 23 - 2



図 19 - 10

報告書抄録

ふりがな	しせき かんぎえんあと					
書名	史跡 咸宜園跡					
副書名	西家の発掘調査成果報告書					
シリーズ名	市内道路発掘調査報告・日田市埋蔵文化財調査報告書					
シリーズ番号	21・第143集					
編著者名	渡邊 隆行、上原 邦平					
編集機関	日田市教育庁文化財保護課					
所在地	〒877-8601 大分県日田市田島町2丁目6番1号 TEL 0973-23-3111(代表) FAX0973-24-7024(直通)					
発行年月日	2023年(令和5年)3月30日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村道路番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 発掘原因
史跡咸宜園跡	大分県日田市 談窓2丁目 4-2-13	44204-6 204037	33° 19' 21"	130° 56' 3"	19次調査 20190821～20190325 19次調査 20190821～20200320 20次調査 20201218～20210323	436m ² 308m ² 71m ²
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
史跡咸宜園跡	塙跡	近世 近代	土坑 構造遺構	陶磁器・石製品	咸宜園の時代（咸宜園が現在の場所で開墾し、閉墾するまでの期間1817～1897）に利用された可能性のある土坑が3基確認された。	
要約	<p>史跡咸宜園跡は、市道御幸通り線を挟み東家側と西家側に分かれる。今回の調査は、これまで未調査であった西家側の史跡の範囲や内容を確認するために行った。</p> <p>調査は、平成30年～令和2年度までの3ヶ年で行い、咸宜園が塾として営まれた近世後期から明治初期にかけての遺構の残存状況の確認を目的に行った。総調査面積約815m²の西家側全体にわたり民間施設の建物基礎などによって一部攪乱され、土間部分や周辺についても近代以降の改変により大半が残存していないことが明らかになった。</p> <p>一連の調査では、咸宜園の時代と想定される廐棄土坑が確認されたものの、絵図に残る塾跡などの建物痕跡を確認することは出来なかった。</p>					

史跡咸宜園跡

西家の発掘調査成果報告書

日田市埋蔵文化財調査報告書第143集

2023年(令和5年)3月30日

編集 日田市教育庁 文化財保護課

〒877-8601 大分県日田市田島2丁目6-1

発行 日田市教育委員会

〒877-8601 大分県日田市田島2丁目6-1

印刷 日田時報紙器株式会社



日田市